

71

361
104

明治天皇御製
昭憲皇太后御歌
讀本



始



特233
184



京都府立
桃山中學校
校長

田中常憲謹著

明治天皇御製
昭憲皇太后御歌
讀本

東京
大阪
文友堂發行



序

明治天皇御製歌は、教育勅語と相表裏し、わが國千古不磨の一大經典であり、わが國民最高の指導原理である。されば、わが國民たるものは、日夕之を拜誦服膺して、以てこれが實踐躬行に努めなければならぬ。聖旨に答へ、國恩に報ゆる所以の道は、實に之を措いて外に無いのである。

昭和五年十月三十日は、教育勅語御渙發第四十周年に當つた。御製讀本は、此の四十周年記念として、吾等が後繼者たる全國各種學校の男女學生々徒諸君、地方青年諸君、并に一般國民各位に日本建國の由來と、肇國の大理想と、及び 天皇中心の活動、皇道精神・日本精神の如何に尊きものなるか。等を 明治天皇の御製歌を通じて一層明確に悉知せしめ、以てわが國體の萬邦無比なる所以を明かにすると同時に、若き人々の純眞な精神を、ますます啓培長養して、日本人としての人格の修養、思想の善導に向つて、今一段の努力を望みたいと思ふ一念から、沐浴齋戒、以て之を謹著したものである。

すでに 明治天皇の御製讀本をものし奉つた以上は、又必ずや 昭憲皇太后の御歌讀本をも

謹著し奉り、之をわが青年男女諸子の座右に呈し、併せて父兄母姉各位にも、是非一讀を願はねばならぬ。これ亦御歌讀本の謹著ある所以である。

明治天皇の御製歌は、その多くは、國を思ひ、世を思ひ、民を思ひ給ふ經世濟民の御教訓であるが、皇太后の宮の御歌は、一天下の國母陛下として、明治天皇の御聖德を顯揚し、天業を輔翼助成し給ふ御坤德の發露であつて、同時に人の母として、又女性としての婦德を御實踐のまゝ、之を御歌に表はし給うたものである。故に、明治天皇の御製歌が、教育勅語の御趣旨を敷衍し昭示し給へる一大經典であるならば、昭憲皇太后の御歌も、亦、明治天皇の御製歌と相表裏した一大明訓であると同時に、日本婦道の一大指針であるのである。

この乾坤二つの讀本は、もと桃山中學叢書として、別個に發行したものであるが、今回、「母ごころ」の著者である私の親友村上寛君から、單に一學校の爲に私せず、之を公刊して、廣く天下に頒ち、一は以て、聖旨の普通徹底を計り、一は以て思想善導の用に資したら如何にと、深切に勧められ、「母ごころ」の出版を以て名高い文友堂主人堀克巳君も、亦來つて懇誘されたので、大いに喜んで之を快諾し、二本を併せて一本とし、且つ新に増補訂正を爲し、今茲に之

を公刊することになつたのである。

冀くは、天下幾百千の男女中等學校は、之を修身科副讀本として、或は參考用として、採用を願ひ、全皇國幾千萬の家々は、家毎に是非一本を備へて、日々、聖旨を拜味して、之を實行に移して戴くことが出來たならば、著者報國の本懐、實に之に過ぐるものは無い。

右の次第であるから、註解も、繁を避け、要を摘み、國體上・思想上、重要性を帯びたもの、又特に注意を要するものは、全身全靈を打ちこんで、之を謹解し奉つてあるのである。

一なほ、書中の題目は、便宜上、著者が類別して設けたものが大部分である。そは、學習上又は修身科に本書を併用せらるゝ場合、引用教授に便せんが爲である。

書中の御製歌は、文部省發行の御集から、御歌は、宮内省御許可の御集から、採録したものであるが、御製歌の中には、他の書から採つたのも、四五首ある。

昭和九年十月二十五日

京都桃山御陵下に於て

田中常憲謹識

友	……二	首	……	五
敬老	……二	首	……	六
幼兒	……三	首	……	七
生物愛護	……六	首	……	八
教育	……七	首	……	九
學問	……九	首	……	一〇
學習	……三	首	……	九
人材登庸	……二	首	……	一〇
大臣以下の人々へ	……五	首	……	一〇
家長	……二	首	……	一〇
學生	……三	首	……	一〇
卒業生	……二	首	……	一〇
海外發展	……二	首	……	一〇
故郷	……七	首	……	一〇
花とりぐ	……十	首	……	一〇
拾遺	……二十一	首	……	一〇
計	百九十九	首		

明治天皇御製讀本

京都府立桃山中學校長 田中常憲謹著

世界に神國あり、日本といふ。日本に神子あり明治天皇と申し奉る。明治天皇は、維れ文維れ武、さながらなる現神にておはしまし 盛徳大業、中外其の比を見ず。實に世界人類中の大偉人、世界帝王中の大帝王にてましまし、同時に天下稀に觀るの大歌聖にてあらせられた。

明治天皇の御治世、わづかに四十有五年。而も東洋の一小帝國たる日本が、忽ち一躍して世界列強の主班に列したのは、實に世界の奇蹟であり、神仙傳的事實である。而して 明治天皇は、是れ則ち地上に於ける神人とも、又人間化せる神とも申し奉るべきであるとは、當年某外國新聞誌の一節であつたが、まことに知言である。

明治天皇の國歌に於かせらるゝ御境地は、天衣無縫とも申し奉るべく、天真にして率直、平

易にして深遠、毫も斧鑿の痕がなく、處に隨ひ、折に觸れ、言語則ち章を爲し、咳唾忽ち珠を成すといふ趣があり、駐蹕三日（結城に於ける）の間に、忽ち二百五十首の大作をものし給ひ、新年の數日（四十一年）に、一氣五百餘首を呵成し給ひしが如き、眞に天馬空を行くの概がある。而して前後詠み出で給へる御製歌の數、十萬餘首を算ふると漏れ承るに及んでは、たゞく驚嘆の外は無い。

而して是等の大創作は、孔子の所謂、行つて餘力あらば、以て文を學べ。といふ御態度を以て、非常な御繁多な御政務の隙々に、おのづと詠み出で給うた詠歎の聲であると拜承する。

思ふことありのまに／＼つらぬるがいとまなき世のなぐさみにして

御政務の外、何等御道樂ととも無き 明治天皇におかせられては、和歌は、實に唯一無二の慰であり、娛であらせられたのである。

而も、其の慰であり、娛であらせられた和歌の御製が、單に彼の花鳥風月を詠するの類でなく、其の多くは、實に國を思ひ、道を思ひ、世を思ひ、民を思ひ給ふ經世濟民の御聲であり、修身・齊家・治國・平天下の御訓であるに至つては、流石帝王の御詠として、景仰讚嘆の外無いのであるが、而も 明治天皇におかせられては、強ひてかく詠み出で給へるにあらずして、

天皇の御神格と御教養とが、知らず識らず、此に至らしめたものであると拜察するのである。

法と、徳と、主・師・親との最高峯に立たせ給へる日本の天皇は 明治天皇に於て、吾等は生ける實體を見た。實に 明治天皇は、吾等の主であらせられたと同時に、眞の師であり親であらせられた。眞の師であり、親であらせられたと同時に、大慈大悲の活如來であり、博愛仁慈の現神にておはせられた。そは 天皇御在位四十五年の歴史が之を證明して餘あるのみならず、以下ものする所の御製を拜誦して、何人も首領することが出来るのである。

是に於てか、吾等は敢て斷言する 明治天皇の和歌の御製は、彼の教育勅語と相並んで、實に日本國民の須臾も離るべからざる一大聖訓であり、一大經典であると。若し教育に關する勅語を太陽とすれば、和歌の御製は、即ち月であらねばならぬ。教育勅語と御製とは、互に相表裏し、互に相經緯し、以て長へに我が國民を教化し、世界人類を指導する一大指針であり、同時に人間界萬古不磨の大文字である。

著者は、この千古不磨の經典たる教育勅語と、代表的御製歌十首とを謹刻せる世界最高の一大記念塔を、教育勅語御發五十周年を期して明治神宮の外苑に建立し、わが國體の尊と、國民道德の美を、普く中外に昭示し、後世子孫をして、萬古に矜式する所あらしむると同時に、

日本の文化を廣く世界に紹介する所あらんことを欲するや、實に切なるものがある。著者はわが九千萬國民の赤心、必ずや此の舉を大成すべきことを堅く信じて疑はぬ。切に大方諸彦の一考を望む。

四

記念塔建設に就いての私案 一昭和五年十月一

- 一、塔の高さは、なるべく世界第一とすること。佛のエツフェル塔三〇〇米。それより高さこと一〇米のものが、最近米國に出來た。ワシントン記念塔が一六九米。クフ王金字塔一三八米。米國の自由塔が一七米。日本で一番高いのが、尾張の佐々美無電塔二五〇米。帝國議事堂の塔は六五米。京都東寺の塔は五七米である。
- 二、塔の表面には、金字もて教育勅語を謹刻す。一字の大きさ六尺平方位、裏面には代表的御製歌十首を謹刻す。又別に臺部に教育勅語の漢譯と英譯とを謹刻す。
- 三、一切の設計は、當代一流の専門家に委嘱し、謹刻の書も、亦昭和の代表的のものたること。
- 四、經費は、設計の如何によつて決定すべし。但し全國の總人口八千三百萬人及び全國の學校就學生(幼稚園より大學に至るまで)一千百五十五萬六千百人に對し、一人當り平均金五錢の贖金をなさしめ、此の總金額約五百萬圓弱を親金とし、餘は全國的に寄附金を募集すること。
- 五、役員は、日本の代表的人物東郷元帥を建設委員長に、内閣諸公及び民・政兩黨首をそれらの役員に府縣知事其他を委員に、而して之が總裁を 宮殿下に御願して、之が大成を期すること。

國

六首

天つ神定めたまひし國なればわが國ながらたふごかりけり

『天つ神』は、造化の三神を始め奉り、伊弉諾尊・伊弉册尊、及び天照大御神などを、廣く指し給ひしものと拜祭する。「わが國ながら」は、「わが子ながらも賢い」などいふ「ながら」と同じ意味の謙辭。

一首の意は、我が大祖先であらせらるゝ天つ神の御力によりて、國土を經營し統一し、君臣一體・忠孝一本の國家を樹立し、以て萬邦無比なる國體の基礎を定め給ひ、遼たり三千年、今や我が國は世界列強の班に列し、國光これ揚り、國威これ隆々たるの有様である。此の如く立派な國柄は、世界にたゞ一つであつて二つと無い。我が國のことをかくみづから褒むるはいかゞと思へど、實に尊い國であるとの御言葉である。

謹んで按ずるに、太古、わが國土が、まだ渾沌として天地の區別も分らない時に、始めて此の

五

土に成りました神様が、天御中主神・高御産靈神・神産靈神の三柱の神様であつた。之を造化の三神と申し奉る。それから天神七代を経て、伊弉諾尊・伊弉册尊の御代となり、こゝに始めて高御産靈神・神産靈神の詔もちて、國土經營の大任を右の二神に御命じになつた。こゝに伊弉諾尊・伊弉册尊の二神は、淡路の自凝島に天降りまし、皇居八尋殿を造り、こゝを根據地として「御國産み」のことが始まり、本州を始め、四國・九州・壹岐・對馬・佐渡・及び其他の島々を次から次と産ませ給ひ、又産みませる數多の御子の神々を、それらの司に任命して、山川・草木・滄海・國土等を掌らしめ、茲に始めて大八洲國の「修理固成」、即ち肇國の大命を遂げ、之を高御産靈神・神産靈神に御復命になつた。

そこで、高御産靈神は、伊弉諾尊と相謀らせ給ひ、此の修理固成せる大八洲國を統治すべき大任を天照大御神に御委任になつた。天照大御神は、伊弉諾尊の御子様で「光華明彩、六合の内に照り徹る」と書紀に記され、女性ながらも日神として、其の御徳太陽に比すべき尊い神様である。こゝに、天照大御神は、御委任のまに上つて天位に就き、高天原を都として六合に君臨しました。是れが即ち日本に於ける國家の始、皇室中心的君民同治の起源である。

日神天照大御神の御威光は、天の下至らぬ限もなく、出雲を中心とせる裏日本一帯は、日神の御弟素盞之男尊の御子孫である大國主命の年久しく經營し領有き給へる國土であつたが、天に二日なく地に二君あるべからず。乃ち日神の大命のまに、大國主命は謹んで歸順の誠意を表し、長く皇室の藩屏たらむことを誓つて、國土を奉還されたので、こゝに天下は始めて確實に統一されたのである。これ恰も徳川氏が、藩籍を奉還して、天下一統の世になつたのに似てゐる。

是に於て、天照大御神は、高御産靈神と御相談に相成り、天孫瓊々杵尊を此の土に下し、天下統治の大任を命じ給ひ、こゝに太古史上最も重大な天孫の降臨となり、天祖の神勅は此に換發せられ、三種の神器は傳國の寶器として「此の鏡を見ることわれを見るが如くせよ」とて、日神手づから天孫に授け給ひ、帝國肇造、國家經營の御鴻業は、かくして、づんづ進展して來た。神勅に曰く、

豐葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく、爾皇孫就きて治らせ。さきくませ。寶祚の隆えまさむこと、まさに天壤と共に窮なかるべし。

此の神勅が、即ち萬世一系・君臣一體・忠孝一本等、皇道即ち日本精神・國民道德・帝國憲法等の根源をなし、以て萬邦無比の國體を樹立したのである。

「さきくませ」に就いて

日本書紀に見えてゐる天祖の神勅の「行矣」とあるを、世の學者達は「さきく」と訓ませてゐるが、「さきく」では語をなさぬ。「さきくませ」とか「さきくあれ」とかすべきである。然るに又世の多くの修身書は此の誤を傳へて、「就いて治らせさきく」と、一語に作つて二重の誤を傳へてゐる。「就いて治らせ」は國に就いて國土を治め給への意。「行矣」は、平安とか、無恙とか、俗に「御機嫌好う」といふ意で、二者全く別語である。纂疏に「行矣は行を送るの詞」と見え、漢書外戚傳の註に師古曰く、「行矣は猶今の好去と言へるが如し」とある。神代紀に「請、姉、照臨天國、自可平安」。齊明紀に「天皇憐重、亦得好」。在「萬葉集五の好去好來歌に「都々美無久、佐伎久伊麻志豆」。同九に「吾子好去有欲得」。同十三に「新夜乃好去通牟」とある。右の如くさきく(幸)は、「いまして」とか、「ありこそ」とか「通はん」とかの如く、下に承ける言葉がなくては語をなさぬやうに、「さきくませ」とせねば、正しい語とは思はれない。大切な神勅ゆゑ、一言して置く。

こゝに瓊々杵尊は、神勅と三種の神器を奉じ、天兒屋根尊・太玉命・天鈿女命・石凝姥

女命・玉屋命等八十萬神を従へ、いよ／＼日向の高千穂の宮に天降りしました。この事明治天皇が、慶應三年車駕東京に御遷幸になつたのに酷似し、感無量である。御年もかれこれ同じ位の御若さで入らせられたかと拜察し奉る。

高千穂宮は、今の宮崎市の附近である。天孫瓊々杵尊は、此處を皇居と定め、天下を知しめすこと年頗る久しく、壽を以て御崩御遊ばしたので、御子彦火々出見尊が、登つて天位に就き給ひ、尋で鵜茅葺不合尊の御世を経て、茲に始めて神武天皇の御代となつた。

神武天皇は、英邁勇武、夙に中央御進出の大志があらせられたが、御年四十五歳の時、いよ／＼之を御決行遊ばすことに相成り、茲に始めて諸兄及び皇子達に告げて宣はせるには、

昔、我が天神高御産靈神・大日靈尊(天照大御神)此の豊葦原の瑞穂國を擧げて、我が天祖彦火瓊々杵尊に授け給へり。是に於て、彦火瓊々杵尊は、天關を闢き、雲路を押し分けて到りましぬ。是時世は鴻荒に屬し、時は草昧に鍾れり。故に養正以て此の西の偏を治め給ひき。皇祖・皇考は、乃ち神乃ち聖、積慶・重暉、多く年所を歴たり。而るに遼遠の地、猶ほ未だ王澤に霑はず、邑に君あり、村に長あり、各々彊を分ちて相凌ぎ慄る。聞く東方に美

地ありと。彼の地、天業を恢弘し、天下に光宅するに足らむ。何ぞ就きて都造らざらんや。

と。諸兄及皇子皆對へて曰く、「理實に灼然なり。我等亦恆に以て念としつ。宜しく早に行きませ」と。茲に神武天皇、いよく東遷の途に上り給ふことになつた。

「双に舩らずして天下を平定せん」との御念願であつたけれども、皇軍に反抗するものがあり、各處に戦を交へ、前後六年の苦心と日月とを費して、車駕始めて大和の地に御到達遊ばされ、茲に建都の議を定め、勅を下し賜ふことになつた。その一節に曰く、

恭しく寶位に臨み、以て大御寶を鎮めむ。上は則ち乾靈國を授け給ひし徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然して後、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇と爲さん。亦可からずや。

と。かくて畝傍山の東南橿原の地に都を營みて、天位に登らせ給ひ、こゝに人皇第一代建國紀元第一年の基を定め給うたのである。

爾來代を代ふること百二十四年を経ること二千五百九十餘年。其の間、治亂盛衰常ならず、政體は幾たびか變遷したけれども、未だ曾つて外國の侮を受けず、天神の定め給ひし我が國

體は、亦曾て微動だもせず、今や一躍して世界の一等國となり、國威隆々、旭日昇天の勢である。是れ「我が國ながら尊かりけり」と、歌ひ給ひし所以かと拜察し奉る。

而も、あはれ 明治天皇御登遐遊ばされてより茲に二十有餘年、内外の形勢大いに一變し、内にしては思想問題・經濟問題等、幾多の難關があり、外にしては國際的孤立となり、通商も亦困難を極めてゐる。かくして推移せば、我が皇國の前途實に寒心に堪へざるものがある。我等國民たるもの、大死一番、以て奮勵蹶起せずして可ならむやである。

橿原のごほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

是は、我が國體の尊嚴と國礎の鞏固にして動かざることを述べて。感恩報謝の意を歌ひ給うたものと拜察し奉る。橿原の遠つ御祖即ち神武天皇が天下を平定して、大和の橿原の地に宮柱を太敷き建て、皇居を造營し、以て建國第一年の基を開き給うてからこの方、二千五百九十有餘年の久しき今日まで、國の礎は微動だもせず、まことに尊い國柄であるが、これと申すも全く皇祖神武天皇の御恩によることで、何とも感謝に堪へない次第であるとの意である。

顧ふに、建國以來二千五百九十有餘年の間には、いろ／＼重大な事變もあり、外寇もあり、或は藤原氏の專横となり、或は幕府の執政となつて、幾變化して來たけれども、神國日本は、八面玲瓏として東海の天に屹然せる富士の靈岳の萬古變らざるが如き有様である。八田知紀翁の歌に

いくそたびかきにごしても澄みかへる水や御國の姿なるらむ

と詠まれたのは、實にわが國體をよく言ひ表はした歌である。我々は舉國一致、ます／＼奮勵努力、以て國礎の安固を計らねばならぬ。

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ

かく微動だもせぬ國柄なれば、國民皆が一致協力して之を守りさへすれば、決して永久に動くことはない。されど、若し國民が外來の惡思想にかぶれて、日本人たるの精神を失ひ、國體の如何なるかをも忘れて、之を擁護するの自覺がなかつたならば、如何に堅固な國礎でも、遂には動いて國家は滅亡する。まことに恐るべきではないか。

「敷島の國」は、日本の別名。「道」とは、人倫の道、人間の踏み行ふべき道の謂であるが、こゝに宣ふ道とは、「古今ニ通シテ謬ラス中外ニ施シテ悖ラ」ざる皇道、即ち教育勅語に宣ふ所の「斯ノ道」のことで、國民道德といひ、惟神の道といふも、皆同じである。

世はいかに開けゆくとも古の國のおきては違へざらなむ

「國のおきて」は、皇國の國ぶり。國體・歴史・道德・制度・法律等で、こゝでは、重に國ぶり・國體・道德等を指し給うたものと拜察し奉る。「たがへざらなむ」は、變革しないやうにして欲しいと、御希望あらせられたのである。

學術が如何に開けて人智が進んでも、世が如何に文化に趨いても、一國の精神であり、魂である國のおきて、即ち國體・歴史・道德等は、斷じて變革するやうの事があつてはならぬ。若し變革するやうなことがあつたら、それこそ國家の破滅である。此の點深く誠め給うてある。

善きをこり惡しきを捨て、外國に劣らぬ國となすよしもがな

實に積極的・進取的な尊い御製である。是れ日本民族が、三千年來の傳統的大精神で、彼の五ヶ條の御誓文に

知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
と、宣はせられた勅諭の御趣意と同じである。

學問知識を、世界に求むるに就ては、毛嫌ひしてはならぬ。ちようど、蜜蜂が蜜を造るやうに廣く何れの花からも求め採らねばならぬが、最も大切な注意は、汚い露や、雨水や、その他不純な汁などは、一切捨て、その中の少量だけでも好いから、純粹な甘汁だけを取つて、こゝに蜂蜜といふ一種特別なものを創造するが如くせねばならない。明治時代の先輩は、かくして驚異的な新日本の大文化を築き上げたのである。

これを上古に溯つて考へて見るに、彼の儒教の渡來に當つても、易姓革命、禪讓放伐の如き惡思想は、一切捨て、忠信孝悌の大道のみを採つて、我が肉とし血とした。佛教の如きも、決して其のまゝには受け入れなかつた。まづ大日本國體、大日本歴史といふ大鎔爐の中に入れて、之を吹き分け、之を分解して、善きは取り、惡しきは捨て、悉く之を日本化して了つた。キ

リスト教も、歐米の文化も、かくして今や殆んど日本化して了つた。マルクス、エンゲルス等の思想も、亦やがて我が大鎔爐の中に入つて、吹き分けられ、選り分けられ、以て日本化せる忠實なる思想となり一教師となつて、我が爲に働いてくれること、彼の釋迦・孔子・キリスト等の我に於けるが如くならむことを、私は信じて疑はぬ。

あゝ。わが敬愛する天下幾百萬の青年よ、生徒よ、學生よ。覺めよ、醒めよ、我が國民性に目覺めよ、わが國體に目覺めよ。わが歴史に目覺めよ。わが國は神國なり。われ等は神の子孫なり。何すれぞ他民族に後れを取つて可なるべき。まして況んや他民族の配下に立ち、他民族の願使に甘んじ、他民族の手先となつて、自國を攪亂するが如きことを敢てすべき。日本の青年は、須らく世界幾多民族の先登に立つて、之をリードするの大覺悟がなくてはならない。天業を恢弘し、天下に光宅せんこと、これ即ち我國建國の一大理想ではないか。

千早ぶる神のこゝろにかなふべく治めてしがな葦原のくに

「ちはやぶる」は、神の枕詞。「葦原の國」は、日本の別名。「しがな」は、たいものぢやと希

望の詞ことば 神の御心に叶ふやうに、此の豊葦原の國なる日本を治めたい。との御希望を述べさせられた御製である。

神の御心に叶ふ御政治とは、即ち、明かき・直き・淨き・正しき御政治である。學者の所謂徳治主義とか、王道主義とかいふ人爲的主義などを超越した、自然の神ながらなる明るい・正しい・皇道政治である。世の爲政者は、宜しく千誦萬誦して鑑かたみとすべきである。

三種神器 二首

天照らす神のさづけし寶こそうごかぬ國のしづめなりけれ

「國のしづめ」は、國の動かぬためのおさへ、おもしである。三種の神器は、皇位授受のみし、いで、天照大御神が天孫瓊々杵尊に、ぎのみことに授け給うてからこの方、世々受け継ぎ給ひて、「鎮國の神寶」となり、「傳國の寶器」となつて、今に及んでゐるのである。

神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日の本つ國

「神代よりうけし寶」は、三種の神器。三種の神器は、下に云ふ皇道的精神を象徴つたもので、此の精神的方面と物的方面とを合せて「守にて」と、仰せ給うたものと拜察する。「治め來にけり」は、天孫瓊々杵尊に、ぎのみこと以來、明治天皇に至るまでの世々の天皇を指し給うたものと思ふ。

一首の意は、天孫瓊々杵尊に、ぎのみことよりこの方、世々の天皇を経て自分の代に至るまで、天祖天照大御神から受け継いで來た三種の神器を、天皇治國の守り本尊ほんぞんとして、動かぬ國のしづめとして大日本帝國を治めて來たのであるが、まことに尊い神寶であるとの御言葉である。

三種の神器は、申すまでもなく、八咫鏡・八坂瓊曲玉・草薙劍であるが、是は單に物的寶器であるばかりでなく、皇道的精神を象徴つたものだから尊いのである。之には學者によつていろいろの説がある。神皇正統記の著者北畠親房は、正直・慈悲・智慧を以て、鏡・玉・劍の意義とし、一條兼良・林羅山・山鹿素行等は、智・仁・勇の三達徳を配し。近代では、眞・美・善又は、智・情・意などの意義を附加してゐる。

天照大御神が、天孫瓊々杵尊に、ぎのみことに寶鏡を授けて「此の鏡を見ること吾を見るが如くせよ」との御言葉には、深い意義のあることと自分は思ふ。即ちわが神ながらなる精神である明き・直き・

淨き・正しき精神は、此の鏡を以て象徴したものである。此の明き・直き・淨き・正しき精神が、即ち天照大御神の御精神で、同時に皇道精神であるのである。熊澤蕃山が「三種の神器は神代の經典なり。上古には書なく、文學なく、器を作りて象となす」といへるは卓見である。

道

四首

千早ぶる神のひらきし道をまた開くは人の力なりけり

「千早ぶる」は、神の枕詞。「道」は、前に申した通り「斯ノ道」であるが、更にその内容に就て申せば、天皇中心の日本民族の結合、君臣一體・上下感孚の切つても切れぬ父子的情の結合、民本的御仁政、犠牲的忠孝大御實と稱へて子撫し給ふ天皇愛、爆彈三勇士的國家奉仕等、是である。「神の開く」とは、即ち「斯ノ道ハ實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」とある通り、皇祖皇宗の神々の開き給ひ樹て給うたものである。「徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」。即ち是である。

下の「開く」は、即ち後世の我等が、ますく「斯ノ道」を擴め充すと同時に、更に日新日進の世に後れず、よきを探り、あしきは捨て、新思想・新道徳を博く取入れて、大に皇基を振起し、燦然たる文化を建設して、以て世界に光被するの意と拜察し奉る。

皇祖神武天皇は、「天業ヲ恢弘シ、天下ニ光宅ス」と宣ひ、「六合ヲ開キテ都トナシ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サン」と宣うた。是れ即ち神の開き給ひし道を、更に開き弘め給ふの大精神である。されば、我等も亦此の御垂訓を奉體し、我が神ながらなる大道を遍く國內に普及徹底せしむるは勿論、更に世界人類に及ぼし、眞に道徳上の帝王となつて世界に君臨することは、實に我等國民の力に依つてのみ始めて出来るのである。願くは「斯ノ道」を擴充し恢弘し、更に東西文化を打つて一丸となし、以て世界の文化に寄與することが、此の大御心に奉答する所以の道であることを思ひ、大に努力して貰ひたいものだと思ふ。

開くべき道はひらきてかみつ代の國の姿を忘れざらなむ

これは、前の御製と、又前の「國のおきては違へざらなむ」の御製とを併せ考へて欲しい。即ち「斯ノ道」を開き廣め、更に他の思想道徳を博採することは、洵に大切なことであるが、これに就て最も注意すべきは、上つ代の姿、即ち太古上古の國ぶり、手ぶりを忘れないやうに

我が國固有の道德、固有の國民精神に違はぬやうに、氣を附けよとの御垂訓である。世の幾多外國かぶれの人々よ、願くは猛省三思せよ。

よこさまに思ひな入りそ世の中に進まむ道ははかざらずごも

「よこさま」は、不義・不正・邪道である。ひたぶるに進み行かうと思ふ我が道、わが事業が、よしや遅々としてはかどらなくても、決して不正不義を爲す勿れ。邪道に陥ること勿れ。飽くまでも天地の公道に従ひ、社會正義に則つて、一舉一動せよ。との尊い御誠である。上大臣より以下、何ぞ夫れ不義・不正・邪道の多き。「渴しても盜泉の水を飲まず、熱しても惡木の陰に息はず」。願くは諸君、深く肝銘せられたい。「思ひな入りそ」のなは勿れ。そは其れ。思ひ入る勿れの意。そをぞと濁るは非。

ならば行く人にはよしや後るごも正しき道をふみな違へそ

「並ひ行く人」は、われと轡を並べ、スタートを切つて競ひ行く人、又同級・同僚など、競争の

仲間。「ふみなたがへそ」のな、そ、は前に言へり。

一首の意は、われと轡を並べて進んで行く競争の敵に、たとひ後れることがあつても、決して不義不正などして、人の人たる正道を踏み違ふことがあつてはならぬ。如何に困つたとて、假にもカンニングなどして、男子の面目を傷けるやうなことがあつてはならぬ。又たとひ競走には負けても、男らしく堂々と負くべしだ。彼の宇治川渡渉に於ける佐々木高綱の行爲の如きは、實に日本武士道の名折である。

敬神崇祖

六首

つくづくと思ふにつけて尊きは遠つみおやの御稜威なりけり

「遠つ御祖」は、諸・册の神様を始め奉り、天照大御神より神武天皇に至るまでの御祖先を、指し給うたものと拜察する。

天祖國を闢き給うてから此の方、治亂興廢常ならざりしと雖も、而も國體の上に何等異變もなく、今や世界一等國として萬國に雄視するに至つてゐるのは、思へば實に遠つみおやの御稜

威であると、報本反始、感恩報謝の餘に出で給うた御製と拜察し奉る。

二三

日本の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

この御製も、前と同じ意味である。「添ひ行く」は、國の光が日に月に駿々乎として進み行くこと。日新日進のわが國運である。

ためしなく開け行く世を見ることも導く神のませばなりけり

これも、同じ御心持を歌ひ給うた御製である。「ためしなく開け行く世」は、東洋の一小帝國が、わづか半世紀足らずの間に、一躍世界列強の上に進出し、ますます發展しつゝあるをいふ。是れ實に世界歴史上曾て例なき奇蹟的事實である。

ごこしへに民安かれと祈るなるわがよを守れ伊勢の大神

蒼古にして神調、國家的大作である。「わがよを守れ伊勢の大神」と仰せ給うた所、至誠日月を

貫き、語力鼎を扛ぐとも申し奉るべし。「いのなる」は、切れたるにあらず、我世に續く語で、「永久に民安かれ」と、朝夕祈らぬ間なきわが世、即ち 明治天皇の御代といふ意。一首の意は明かで、有り難しとも有り難し。

遙にも仰がぬ日なしわが國のしづめと立てる伊勢の神垣

「遙かにも仰がぬ日なし」。毎日く御遙拜遊ばすのである。われ等臣民も、亦、此の心懸を以て、毎朝伊勢大廟を遙拜致したいものである。「我が國のしづめ」は、國の動かぬための押へ、國の守り神。「伊勢の神垣」は、伊勢の大神といふ意に同じ。

國民のひとつ心につかふるもみおやの神のみ恵にして

國民が、一心同體となつて天皇に仕へ奉ることは、實に天皇におかせられては、唯一無二の御喜びである。而して此の喜びを得るも、全く天祖・皇祖の御恵であると、感恩報謝・敬神崇祖の至誠を漏らし給うた御製である。

二三

敬神崇祖の精神は、わが國體の基礎である。わが國にていふ「神」は、彼のゴッドとか、佛とか、いふが如き理神でなく、天照大御神を始め奉り、幾多舉國の御事業に功勞のあつた諸々の神様、夫れから神武天皇より 大正天皇に至るまで百二十三代の天皇、及びこれ等天皇を中心として國家の爲に働いた皇族の御方々、竝に幾多忠臣・義士・孝子・節婦等が、神として祀られてゐる人々をいふのである。

「祖」とは、廣い意味で二つある。一つは今述べた神々様。一つは我等家々の祖先。即ち上天照大御神の時代から、下今日に至るまで、皇室を中心として天壤無窮の寶祚を扶翼し奉つて來たわれ等臣民の祖先である。

而して、是等の神、是等の祖先は、前にも述べた通り、此の日本國を肇造し、萬邦無比の國體を建設し、三千年の美しい歴史を造り、燦然たる日本文化を産み出して世界の一等國にまで築き成した方々である。今日燦然として世界に輝く日本の文化は、皆是等祖神祖先の努力の累積である。我々が生産し、我々が造り上げたものは、まだ一つも無い。我々は、皆祖神祖先の恩恵に頼つて、今日以前に建設された精神的・物質的文化の御蔭によつて、日々生を、樂み世渡

りを爲し、世界一等國民として、列強の間に幅を利かしてゐるのである。

此の廣大無邊な恩恵に對して、誰か感謝せざるものぞ。「あゝ有り難い」。との嘆聲は、人間である以上、必ず心の奥底から自然に湧いて來る筈だ。此の「有り難い」といふ嘆聲が、即ち敬神崇祖の誠となつて現はれるのである。

是に於てか、祖神祖先に向つて、報本反始・感恩報謝の誠を捧けて、之を敬崇すると同時にわれ等の祖神祖先が建設して下さつた此の日本の尊い文化の上に、更に新しき善きものを建設し——といつて、決して基礎を破壊し、「おきて」を變革してはならぬ——之を改善し、修繕し、増築して、以て現在をより大きく、より高く、力あらしめ、光輝あらしめ、而して更に之を後世子孫に譲り渡すといふことが、即ち報本反始・感恩報謝の最も大切な職分であるのである。過去に感謝し、現在を偉大にし、以て未來に譲り渡す、此の三つの努力が、即ち敬神崇祖の根本義である。此の點、御互篤と心得て、朝夕之が實行に力を入れたいものだと思ふ。

誠

四首

鬼神を泣かするものは世の中の人の心の誠なりけり

「誠」の尊きを訓へ給うた御製である。「誠」は天真である。まごころである。誠心誠意、嘘の無い、飾り氣の無い、純真な心である。「一片の丹心萬古を照らす」といふ丹心である。赤心である。「泣かする」は、感動せしむる意。

目に見えぬ鬼神を感動せしめ泣かしめるものは、御仰せの如く、實に人の心の誠である。心の誠を以て對へば、我々人間を感動せしむるは勿論、鬼神も亦感動し、禽獸だも亦感動する。猛虎が孝心に感動して、少女の前に耳を垂れ尾を垂れてひれ伏したといふ物語もある。孟子曰く「誠は天の道なり。之を誠にするは、人の道なり。至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」と。誠の心を以つて君に仕ふれば、君必ず動く、之を忠といふ。誠の心を以て親に事ふれば、親必ず動く、之を孝といふ。兄弟に在つては友、夫婦に在つては和、朋友にあつては信、人には仁慈となり、生物には愛護となる。而してその因つて生ずる心の本は、皆「誠」の

一字から来る。故に曰く「天の理法は誠の一字に歸す」と。誠の尊き所以知るべしである。

目に見えぬ神にむかひて恥ぢざるは人の心の誠なりけり

是れ亦「誠」の尊きを訓へ給うた御製である。「神に對ひて恥ぢざるは」は、俯仰天地に恥ぢざること。何等心に疚しいことがなく、神の御前でも毫も恥づることの無い光風霽月の如き清きさわやかな襟度である。「神人冥合」。「神人一如」といふ境涯である。

かくも清い爽やかな襟度・境涯を、吾等は日常不斷有つてゐたいものである。然らば如何にすれば之が得られるか。そこで 明治天皇は、「人の心の誠なりけり」と御垂訓になつた。實に千古の金言である。誠！ 誠！ 誠は人間行爲の根本である。御互「誠」の一字を以て、始終したいものである。

ごき遅きたがひはあれど貫かぬことなきものは誠なりけり

「とき」は、疾である。速である。「たがひ」はちがひである。差別である。人には遅速賢愚

のちがひはあるけれども、誠の一字にあらば、如何なる事業と雖も、貫徹せぬことは無いとの御訓である。是亦千古の鐵則で、彼の勝海舟が、大西郷とたゞの一度の會見で、江戸城を明渡し、旗本十萬の生靈を水火より救つたのも、亦「誠」の一字の働であつた。

何事におもひ入るごも人はたゞ誠の道を踏むべかりけり

人は如何なる業務に志しても、たゞく誠の道を踏んで世を渡れ。然らば躓くことは決してあるまいとの御仰せである。「誠」は天の道で、我が皇道の根本精神である。

今や、天下滔々として浮華輕佻に趨き、「誠」の一字、漸く地を拂はんとし、眞劍・眞摯の如き尊き精神も、日一日と薄らいで行くかの如き現状は、實に國家の深憂大患である。星に泣き董に泣く亡國的涙は多いけれども、世の爲、國の爲に澀ぐ大男兒の涙に乏しい。「一滴の涙痕千金よりも尊し」。かゝる涙は、「誠」の中からでなくては、湧いて來ない。

あゝ日月明かなりと雖も、あはれ國家の現狀を如何せん。前途を如何にせん。之を濟ひ之を打開して、國光を世界に發揚するは、只誠ある・眞劍味ある・まじめなる・青年諸君の努力を

措いて外に無いのである。頼む！ 頼む！ 國家の爲に頼む！

日本魂

六首

事しあらば火にも水にも入りなむと思ふがやがて日本魂

日本魂、日本精神のはたらきを論し給うた大作である。「事しあらば」は、一旦緩急あらばの意、一旦緩急ある場合には、水火をも辭せず、一身一家を抛つて國の爲盡さんと思ふ犠牲奉公の精神が、即ち日本魂であるとの御仰せである。藤田東湖、吉田松陰兩先生の正氣の歌は即ち此の心持を歌つたものである。

「神州誰君臨。萬古仰天皇帝。」と東湖先生はいひ、「仰見天子尊。神州臨萬國。乃是大道根。」と松陰先生は申された。天皇中心・皇室中心の活動が、即ち日本魂の根本精神である。是れ前章幾多の御製にもある通り、天皇の我々臣民を子慈し給ふ御仁愛に對して、われ等臣民がやむにやまれぬ感恩報謝の發露である。即ち上下感孚の發現であるのである。物部氏が佛像を難波の堀江に投じたことや、中大兄の皇子が入鹿を殺した事や、和氣清麿・田村將軍・北條時宗・楠

公父子、下つて四十七士、櫻田の義士、維新の志士、日清・日露の忠勇義烈の將校下士卒、近くは滿洲事變・上海事變等に參加した將卒の獻身的大活動は、皆是れ日本魂の發露である。此の魂熾んなれば、國家は興隆し、此の魂微なれば、國家は則ち衰微する。思はざるべけんやである。

「やまとだましひ」は、大和魂と書くのが、從來からのならはしであるけれども、私は特に之を「日本魂」としたい。そして「につほんこん」と音讀にもして、昭和の青年達に、大いに高調させたいと思ふ。

敷島の大和心をみがけ人いま世の中に事はなくとも

「やまと心」は、即ち日本魂と同じである。日本魂を培ひ養ひ、磅礴として天地の間に漲らすべく努力せよ。と御訓へになつた御製である。「敷島」は、やまとの枕詞。一首の意は、今は世の中に事はなく、天下泰平なれども、「治に居て亂を忘れず」、大いに日本魂を磨き養ひ、まさかの場合に御用に立てよとの御仰せである。尙、委しくいへば、平時が最も大切である。平時に於

て、國民精神を作興し、日本魂を練磨し、國の爲、世の爲、眞劍になつて各自其の職務に働き、以て皇室の御繁榮を計り、國家の興隆を計るといふ精神が、即ち日本魂であるぞよ。との大御心である。

日本魂に、二つの魂がある。一つは荒魂、一つは和魂である。荒魂は、一朝事ある際に發する魂で、發しては萬葉の櫻となり、凝つては百鍊の鐵となり、肉彈又肉彈、敵を殲滅せねば止まぬといふ忠勇義烈な魂である。即ち前の御製にある「火にも水にも入りなむと思ふ」心である。

和魂は、此に申した平時の場合、天下泰平時、上下一致、相和し相睦み、各々其の生業に樂むといふ和平協同の魂がこれである。即ち「皇路の清夷に當つては、和を含んで朝廷に吐く」の魂である。

此の二つの魂は、平常に於ても、絶えず活動してゐる。積極的・進歩的・鬪争的勇猛な精神は、即ち此の荒魂の動きで、消極的・保守的・和平的柔らかな行爲は、即ち和魂の動きである。神功皇后の三韓征伐の時に、住吉の神様の御誨に因つて「荒魂を搦きて軍の先鋒と爲し、和魂を

請ひて王船の鎮と爲す。とあるに因つても、その作用を知ることが出来る。此の二つの魂が、常に表となり裏となり、陽となり陰となり、互に相助け相和して、以て立派な人格的活動となるのである。

敷島の大和心をみがかずば劍おぶともかひなからまし

堂々たる大垂訓。陸海の軍人、警官の方々、果して顔色ありや。實際一死以て君國に殉ずるの大精神がなかつたならば、徒らに長劍を腰にぶらさけて威張つて見ても、何の甲斐もありませぬ。全く案山子や木偶と同じだ。是れ豈獨り軍人警官のみなむや。御互國民たるものは、日夕大和心を心に銘して、ますます砥礪以て大君の御用に立つべく心懸ねばならぬ。

やき太刀の外國人に恥ぢぬまで大和心をみがかき添へなむ

「焼太刀」は、よく切れるから「利」の枕詞で、とから轉じて、つ國の枕詞となり、又磨きの縁語ともなつてゐる。一首の意は、外國人に恥ぢないやう、いよくますます日本魂を養

つて呉れよかし。と望ませらるゝ御述懐のおん歌である。「そへ」は添加の意で、一層ますます。

「なむ」は、欲しいといふ希望の詞。

國といふ國の鑑となるばかり磨けますらを日本魂

「國といふ國」は、世界萬國のこと。「ますらを」は、大丈夫、大男兒といふ意で、重に青年諸君を指し給うたものと拜察する。一首の意は、世界萬國の鑑となり模範となつて、彼等萬國の人々から尊ばれ、仰がれるやうに、日本魂を磨いてくれ日本の青年達よと、御切望になつた御製である。

日本魂を磨くといふことは、とりも直さず質實剛健なる國民精神を涵養し振作することである。質實剛健なる國民精神を涵養し振作すれば、國家は必ず興隆し、國光は必ず發揚する。國家が興隆し國光が發揚すれば、世界の國といふ國は、必ず我が國を手本とし、我國を仰ぎ尊ぶやうになつて来る。故に 大正天皇は宣はく

國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラ

と、即ち此の意である。

くろがねの射し人もあるものを貫きこほせ日本魂

格調雄渾、意氣剛健、常人のものし難い丈高い御製である。「くろがねの射し人」は、盾人宿禰である。

宿禰は仁徳天皇の朝の人で、書紀に「高麗國、鐵の盾・鐵の盾の的を貢獻す。天皇、群臣百寮を集めて獻る所の鐵の盾・鐵の的を射しむ。諸人射通すこと能はず、たゞ的臣祖盾人宿禰、鐵の的を射て之を通しつ。高麗の客之を見て、其の射の勝れたるを恐れ、共に起つて朝を拜す明日宿禰を美めて名を的戸田宿禰と賜ふ」と見ゆ。是れである。

「つらぬき通せ大和魂」は、大和魂の力を以て汝の目的を貫徹せよ。との意。陽氣の發する處金石も亦透る、精神一到何事か成らざらむである。

わが國が、維新以來、國運駸々として進み、日清・日露の兩戰役を経て、一躍世界列強の上に

進出し、更に世界大戰、近くは滿洲・上海兩事變を経て、滿洲帝國の獨立を援助し、國際的重壓を賭しても尙且つ滿洲帝國の獨立を承認せるが如き大氣魄大勇斷は、そも、何の力であるかと問はゞ、私はたつた一言で答へる。曰く「日本魂の力である」と。當時に於ては、支那も大敵であつた。ことに露國は、世界の六分の一を領有した強國で、人口も多く、兵力も多く、武器も多く、軍資も多く、到底日本の敵すべき國ではなかつたのである。殊に滿洲・上海の兩事變、滿洲帝國獨立の承認の如きは、世界を敵として戦ふも猶且つ辭せぬといふ前提の下にやつたのである。而して物の見事に、その國策を遂行し得たのは、他でもない。肉彈又肉彈、爆彈又爆彈、死を見ること歸するが如き日本魂の活躍、只是れのみである。

諸君試に思ひ給へ、現下我が日本が世界の一大強國として、渾圓球上に雄視し、特に英・米・獨・伊などから恐れられてゐるのは、果して何の爲であらう。國の廣きが爲か、人口の多きが爲か、國富の優れたるが爲か、物資の豊富なるが爲か、はた又國軍の力の優つてゐるが爲か、否、あらず。たゞ君國の爲には、舉國一致、一死以て之に當るといふ日本魂あるが爲である。

此の日本魂が熾んであるが爲、目下英米との均等は保たれ、世界の平和は保たれ、世界萬國も

亦日本を恐れてゐるのである。若しこの氣魄・精神が微弱になつて、日本の日本たる一大特長・一大國民性が失はれたなら、日本は第二の支那となつて了ふより外はない。わが國民たるものは、深く念を此に致し、ますます猛省して奮起するところがなくてはならない。

帝國憲法 二首

さだめたる國のおきては古のひじりの君の御聲なりけり

「さだめたる國のおきて」は、主として帝國憲法を指し給うたものと拜察する。一首の意は、わが制定した帝國憲法は、決して自分一個の考で定めたのではなく、又外國の輸入でもなく、いにしへのわが聖帝の定め給ひし御聲である。即ちわが皇祖皇宗の遺訓であり、神ながらなる神意であるとの御こゝろ。帝國憲法の第一條に

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

とあるは、即ち彼の天祖の神勅を奉體して、二千五百九十有餘年來遵守されて來た歴史上の事實である。

第二條の「皇位ハ云々皇男子孫之ヲ繼承ス」とあるも、亦天孫瓊々杵尊以來皇室の御家法である。第三十三代推古天皇以後、多少女帝の御踐祚なきにしもあらねども、之は一時の變則に過ぎなかつた。第三條の

天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

も「天地剖判シテ神聖位ヲ正ス」と神武紀にあつて、天皇は現神と稱へ、古來萬民の上に神位を正し給うたのである。

第四條の「天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ」とあるも、亦天孫以來の國憲である。中世しばしば變亂を経、政綱其の統一を弛べたけれども、是れ亦一時己むを得ぬ便宜に出でたるに過ぎなかつた。その他の條章一として上古の制にあらざるは無い。「聖の君の御聲なりけり」と宣うたのは、獨り我が帝國憲法にのみ言ひ得る世界の光輝であり、千古の鐵則である。

上つよの御代のおきてを違へじと思ふぞおのが願なりける

この「おきて」は、上つ代からの制定にかゝる、國憲・國法を始め、習慣・儀禮・道德等を

含めて仰せ給うたものと拜察する。

「たがへじ」は、違へますまい、變革しますまい。といふ意で、上古皇祖の定め給うた我が國の「國のおきて」は、決してたがへぬやう遵守して行きたい。との御思召である。これ等の「おきて」は、國體の基礎をなしてゐるのであるから、決して變革してはならぬものである。

「國」二道」の幾多御製を通じて 明治天皇の大御心は、此の精神で一貫してゐるのに、深く注意して貰ひたい。然るに此の「國のおきて」を破壊し、三千年の歴史を破壊し、萬邦無比の國體を破壊せんとする、一種の精神病者が、我が國民中から出たのは、又出つゝあるのは、實に遺憾の極みであるが、そは太陽の前に於ける片雲に過ぎないことを、我等は茲にわが有爲の青年諸君と共に、之を斷言するを憚らぬものである。

御 仁 政

二十一首

曉のねざめ靜に思ふかなわがまつりごといかゞあらむと

これは、「述懐」といふ題にて詠ませ給うた御製であるが、至誠熱烈なる御自省のさま。眞に

恐懼に堪へない。

古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

これ亦御述懐である。「いにしへのふみ」は、古典、世々の歴史などの書。

かくかりそめの寢ざめの御床にも、又古の書など御覽遊ばすにつけても、常にみ思はわれ等臣民の上にあらせられる。我が政治は果して善く行届いてゐるかどうか、罪無きに泣く民はあらずや、醫藥無くして病になやむ不幸の人は無きか、民草の生活状態は如何に、思想問題・經濟問題は如何に。己が治むる現代の日本國は、中外古今の列聖賢王の御治世と比較して果して如何であらう。至らぬことはなきか。との強き御反省であるが、實に有り難く尊い限りではないか。

ひこり身を省みるかな政治たすくる人はあまたあれども

「政治佐くる人」は、宮内官の人々を始め、總理大臣以下の大臣達。かく輔弼の人々は澤山あるけれども、而もなほ我が身に過は無きか、政治上に缺陷は無きかと、獨り日々反省して見るとの大御心。たゞノ、感激の外は無い。

罪あらばわれを咎めよ天つ神民はわが身の生みし子なれば

天つ神よ、もし民が罪を犯して天罰を加へ給ふことがあつたら、それは自分を罪し給へ。民は自分の生んだ子。民の悪いのは親のわるい爲であるから、どうぞ自分を罰し給へとの御仰せ神功皇后の三韓征伐の詔に「若し事就らば、群臣共に功あり、事就らずば吾獨り罪あらむ」と宣はせたと同じで、「民の富は朕の富なり」。「民の罪は朕の罪なり」との御精神は、世界に二つとない神ながらなるわが君道の根本義である。

明治天皇四十五年の御治世は、盛徳大業、世界歴史あつて以來、未だ曾つて無い驚異の事實で、中外人の齊しく渴仰讚嘆して措かざる所である。にも拘らず、かくも強き御自省の御聲を承るといふことは、實に世界の人主に類例のないことで、是が我が皇國に於ける傳統的皇室の尊い

美しい御精神である。天皇既に此の御心あり、臣民豈感泣して一身を獻けざるを得んやである今上天皇御即位式の勅語に、

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘキ所ナリ
と宣はせたのは、實に宜なるかなである。

上つ代のことをつばらに記したる書をしるべに世を治めてむ

「上つ代の云々」。これは古事記、日本書紀などを始めとして、上代の典籍・歴史等の書を指し給うたものと拜察する。「つばら」は詳かである。即ち是等の書を道し、べとして、言ひ換ふれば、皇祖皇宗の遺訓に則つて、わが世を治めむとの御意、洵に有難い御思召である。我々國民も亦、皇祖皇宗の御遺訓に則り、又 明治天皇の御宣らし給うた教育勅語の御精神を日々の實行に移して、御國の爲 天皇陛下の爲、奮闘したいものである。

照るにつけて曇るにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと

照るにつけては早魃を憂ひ、曇るにつけては、水害を憂ひ給ふ。まして寒暑・風雨・地震・火災等の天變地異に於ては尙更である。日夕不斷、一寸した事にも、我が民草の上に障りなきかと、御軫念遊ばす大御心の程、有り難い次第である。

國民のうへ安かれと思ふのみわが世に絶えぬ思なりけり

「おもふのみ」の「のみ」。及び「絶えぬ思」に注意せよ。わが思は外になんにもない。たゞ國民の安寧幸福にあれかしと思ふことのみが、我が世に絶えない思であるとの御意。

暁のねざめの床におもふこと國と民との上のみにして

前の御製と同じ御意。「上のみに」注意せよ。勿體ない。忝ない。

千早ぶる神ぞ知るらむ民のため世を安かれといのる心は

「千早ぶる」は、神の枕詞。「世を安かれ」は、色々の意味がある。風雨時に順ひ、寒暑其の時を得、五穀稌々としてよく登り、以て萬民が安樂をするやうにとの意を始めとして、思想上、經濟上、其の他百般の國情が、宜しき正しき道に進んで、天下泰平、人民安寧、以て生を樂しむやうにとの御意かと拜察し奉る。「民のため」に注意せよ。

かく「民安かれ」と祈る心は、人にも語らず、色にも出さぬから、誰も知るまいが、皇祖皇宗の神々様は、よく御照覽ましますことと思ふ。との切ない御衷情である。

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる樂はなし

以上數首の御製の如く、民草の上をのみ思ひ給ひ、祈り給うて、御心の安まる時とは入らせられぬのであるが、さて萬民が各自其の精神を作興し、一所懸命になつて、各がじしその職業にいそしむはけんで居る眞劔な世の中のさまを御覽になると、どんなに御喜びになるであらうか。されば 明治天皇は、かゝる世の中のさまを見るに優れる樂は外にないと、御仰せになつた。洵に有難い極である。されど、若し之が反對の國情であつたなら如何に。實に恐懼に堪

へない次第ではないか。國家を以て家とし、天下を以て職とし給ふ上御一人の御心、拜察する
だに涙の料である。

國のためた、れずなりし民草に惠の露をかけなもらしそ

これは、明治三十九年日露戦争直後の御製である。「國の爲立たれずなりし民草」は、廢兵又は
あはれな遺族である。その廢兵やあはれな遺族の上をおほし召し給ひて、論功行賞、又は遺族
扶助等の詮議に當り、一人でも惠みの露にもれないやうにと、有司の人々に警告し給うたもの
と拜察する。まことに有り難い限りである。

ほごくくに心をつくす國民のちからぞやがてわが力なる

「ほごくく」は、貴き賤しき、大なり小なり、身のほごくくで、一人の遊民もなく、各々其の
職務に心を盡すことである。その心を盡して働いた總量が即ち國の力で、同時に天皇の力であ
る。「民ノ富ハ即チ朕ノ富」である。「天皇即國家」「國家即天皇」の理法は、ひとり我が國、

我が國體に於てのみ當筋るのである。

しづがすむ藁屋のさまを見てぞ思ふ雨風あらしき時はいかにこ

「しづ」は、賤しき民。賤しい貧しい民の小さい藁屋の堀立小屋など、御巡幸の時、御覽にな
つたのであらう。「農家」と題して御詠みになつたのが此の御製である。「雨風あらしき時は如何
にと」と、御同情遊ばした大御心のほど、心をとめて見よ。廟堂の諸公や縣知事など、よくく
奉體すべき事柄である。

民のため年ある秋を祈る身は堪へぬ暑さも厭はざりけり

「年ある秋」は、漢語の有年で、豊年のこと。「堪へぬ暑さ」は、堪へきれぬ暑さである。炎暑
甚しき年は豊年だといふ。この意味からして、人民の爲に豊年を祈る我が身には、堪へきれぬ
此の暑さも厭はぬとの御仰せ。畏れ多い事ながら、全く「人民の爲の犠牲」、「人民への奉仕」で
入らせられる。「天皇への奉仕」、豈に起らざるを得ないではないか。

かくわが皇國では、皇室の方からわれ等臣民に恵を垂れ、慈愛を懸け給ふこと、恰も親が子を慈しむが如くである。故に 大正天皇御即位の詔勅にも、

義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノ如ク以テ萬邦無比ノ國體ヲナセリ
と仰せられてある。尊きかなわか皇國！

暑しごも言はれざりけり煮えかへる水田に立てる賤を思へば

これも、眞夏八月の暑き日に、御詠みになつた御製かと拜察する。水田に立つて田草を取る賤の男女のことを思へば、暑いなどとは申されぬと、満福の御同情を寄せ給うたのである。

埋火にむかへご寒しふる雪のしたにうもれし人をおもへば

これは、寒い冬の夜、「をりにふれて」の御述懐である。「埋火」は火鉢に埋めた炭火。その暖い炭火に對してもなほ寒い。「寒い」と仰せられたのは、心の寒さである。ふる雪の下に埋もれたあはれな人達を思ひ給ふ心の悲みである。たとひ身は埋火に對つてゐても、心の寒さに堪へ

ぬとの、御仁慈の御思召である。

ちよろづの民の心を治むるもいつくしみこそ基なりけれ

「いつくしみ」は、仁であり、慈であり、愛である。ちよろづの民即ち萬民を治むる政治の根本は、仁慈・仁愛であるとの御垂訓で、實に有り難き千古の鐵則である。爲政者は勿論、人の上に立つ世の人々の心すべき第一信条であらねばならぬ。

謹んで按ずるに、わが國體の精華の根本は、實に皇室の慈悲仁愛に在る。言葉を換へて申せば、畏れながら、わが世々の天皇の民本的犠牲奉公の傳統的精神にありと信ずる。世々の天皇はいづれも皆齊しく「國民の上安かれと思ふのみわが世に絶えぬ思」で入らせられ、全く「臣民への犠牲的奉仕」。「臣民への献身的努力」で入らせられた。是を以て、我等臣民も亦感奮して、「天皇への犠牲的奉仕」。「天皇への献身的努力」となり、上下感孚して、以て君臣一體の純美な國體を造り成したのである。

わが天祖が、始めて此の土に天降りまし／＼たのも、萬代子孫臣民の安寧幸福の爲に、美地

を求め給はんが爲であつた。既に千五百秋の瑞穂國を見出して、修理固成の大創業を爲し給うたのも、「民安かれ」の御仁政を布き給はん爲、神武天皇の御東遷も、全土臣民の福祉安榮の爲、それ以外他に何の御念慮もなかつた。神武天皇の詔に、

夫レ大人制ヲ立ツルヤ義必ズ時ニ隨フ苟モ民ニ利アラバ何ンゾ聖ノ造ヲ妨ケン

と仰せ給ひ、崇神天皇は

惟フニ我が皇祖諸ノ天皇等ノ宸極ニ光臨セサスモノ豈一身ノ爲メナランヤ。云々。黎元ヲ愛育マンガタメナリ。

と仰せられ、垂仁天皇は、

父天皇ハ神祇ヲ禮マヒ祭り、己ヲ剋メ躬ヲ勤メ、日一日ト慎ミ給ヒキ。是ヲ以テ人民富ミ足ラヒ、天下太平ナリキ。

と仰せられ、仁徳天皇は、

君ハ民ヲ以テ本ト爲ス。云々。百姓ノ貧シキハ朕ノ貧シキナリ。百姓ノ富メルハ朕ノ富メルナリ。

と仰せられて、明かに民本主義の御政治を高調し給ひ、雄略天皇は、

方今區宇一家ノゴトク、烟火萬里、百姓ハ艾安ナリ。云々。義ハ即チ君臣ナレドモ情ハ父子ヲ兼ヌ。云々。筋力精神モ一時ニ勞シ竭セリ。此ノ如キ事、本ト身ノ爲ニアラズ、止ダ百姓ヲ安養セント欲スレバナリ。

と仰せ給うた。此の如きは枚擧に違あらず、大化の新政の如きは、民本的大改革でありしのみならず、一部何百卷といふ六國史以下世々の史實は、皆悉く「國富み民安かれ」の御仁政の記録に外ならぬ。

われ等今 明治天皇の御製を拜誦するに、是れ亦一として國を思ひ民を思ひ給ふの御歌ならざるはない。是れ全く神代よりの傳統的中心精神であつて、世界萬國に比類なき善美の國體の無窮に續く所以である。我等臣民たるものは、此の有り難い國體の根本義を、よくよく辨へ、ますます國運の進展に向つて、層一層の努力を拂ふことを以て、衷心の念とせねばならない。

なりはひをたのしむ民の喜びはやがてもおのが喜びにして

「なりはひ」は、生業。生活のための職業。「樂む云々」は、樂んで生業を勵み、生活の安定を得るの喜び。「百姓ノ富ハ朕ノ富ナリ」と仁徳天皇の宣ひし如く、民の喜びは、天皇の御喜び、民の悲みは天皇の御悲み。故に樂んで生業を勵み、各自生活の安定を得るの喜びは、即ち天皇の御喜びであつて同時に父母祖先の喜びである。天皇に在りては之を忠といひ、父母祖先に在りては之を孝といふ。忠孝一本の美、此に成る。勉めざるべけんや。

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

眞に勿體ない。大日本帝國を知らしめす一天萬乘の大君にして、此の御言葉は勿體ない。而も目の當り此の事實を見奉つたわれ等明治の臣民に於てをやである。此の事、世界の帝王に無し。たゞ獨り日本の皇室にあるのみ。國體の精華、蓋し偶然にあらずである。借問す、廟堂の諸君子・世の富豪・紳士淑女、並に學生諸君、卿等は此の御製を奉誦して、果して如何の感がある。避暑、避暑など、思ひもよらぬこと。今後の夏休み、冬休み、春休み等には、今より一層心身の鍛錬、忍苦的修養にと、心懸けたいものである。

世の爲にも思ふ時は庭にさく花も心にごまらざりけり

これは、明治三十七年日露戦争中の御製である。如何に世の爲、國の爲、御宸襟を惱まし給ひしか。われ等想像の外である。「庭に咲く花」は、つい近く御庭先に咲いてゐる花である。その手近くの花にだも、心のとまらぬとの御仰せ、畏くも尊し。

松風の音のみき、て年も経ぬいつかゆき見む天のはしだて

噂のみ聞き給ひし 明治天皇は、果してよく此の御素願を遂げ給ひしか。天橋六里の松は、今なほ健在なれど、大君の玉の御車、今いづこにか駐まれる。感いと深く侍る。

日露の役に詠み給へる

十五首

おりたちて見る暇なき春さしも知らでや梅の咲き匂ふらむ

明治三十七年日露開戦當時の御製である。「皇國の興廢此の一戦に在り」との信號は、世界

に名高い歴史的大文字であるが、實に此の役は、乾坤一擲、國家の運命を賭しての大戦争であつたのである。畏れ多くも、わが 大元帥陛下は、開戦以來、日夜軍務に御鞅掌遊ばされ、宵衣旰食、殆んど御寸暇もあらせられぬ御有様であつた。「……知らでや梅の咲き匂ふらむ」。實に多情多恨の御作ではないか。又ある時は、

戦のには立つ身をいかにぞと思へば花も見ること、ちせず

と、出征の將卒を思ひ給うて、無限の同情を寄せ給ひ、又花に對し給うては、

近からばわが庭ざくら北支那の軍營に折りてやらましものを

と、見るもの聞くものにつけて、御思はたゞ出征軍人の上のみあらせらる。夏に入りては、

軍人いかなる野邊に明かすらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを

蚊の聲しげくなるにつけても、「如何なる野邊に明かすらむ」と思ひやり給ふの御切情。肉親以上である。暑さに向へば

千萬のあたを恐れぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ

と、滿腔の御あはれみを懸けさせ給ひ、家族の上を思ひ給うては、

子等はみな軍のにはに出で果て、翁やひとり山田もるらむ

と、萬斛の熱涙と同情とを田家翁に寄せ給ふ。戦報を待ちわび給ひては、

戦のにはの音信如何にぞこねやにも入らず待ちにこそ待て

「待ちにこそ待て」の御言葉。如何に切なる御心情ぞ 大元帥陛下としての當年の御心中、拜察するだに恐懼に堪へない。捷報を得給ひては、

軍人つくす力のあらはれてけふも進みしたよりをぞ聞く

と、喜ばせ給ふ。進みしは、數城を抜いて、更に十里二十里と進軍するの謂で、勝ちにしなど宣はせざるところ、畏れながら 明治天皇の巨腕を想見する事が出来る。戦死の報を聞こしめし

ては、

戦に身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして

と、悲しませ給ひ、將來ますます國の力となるべき年若き將校士卒の死を嘆かせ給ひては、

とし經なば國の力となりぬべき人を多くも失ひにけり

と、嘆かせ給ふ。

はからずも夜をふかしけり國のため命をすてし人をかぞへて

この御製は、當座の實感を歌はせ給うたもので、漏れ承る所によれば、當時 明治天皇は、戦死者の名簿を畏れ多くも御座右に備へ給うて、御身躬ら一々御覽遊ばしたとか。洵に有り難き御仁慈、戦死者諸君も、亦以て瞑すべきである。

三十八年一月二日、旅順開城の報を得させ給ひて、

新しき年のたよりに仇の城開きにけりぞ聞くぞうれしき

と躍り喜ばせ給ひ、城下の盟成りては

かちごきをあげて歸れる軍人ま近く見るが嬉しかりけり

と、御満悦の御眉を輝かせ給ひ、出征の將士凱旋すと聞こし召しては、

いさましく語りかはして軍人歸る船路に月や見るらむ

と詠ませ給ふ。渤海灣頭月明かなり。船は舳艫相銜んで、一步一步と祖國に向つて近づく。凱旋の將士は、思ひくの戦話に花を咲かす。九重の雲井にましながら 明治天皇の御思は遠くこれ等將士の上に及ばせ給ふ。御會心の狀、一首の上に横溢せるの感がある。

二ヶ年に亘る大戦争も、此に目出度く終局し、わが帝國は一躍して世界列強の班に列し、國光赫奕として世界を壓するの勢である 明治天皇は、文武百官を従へ、車駕西幸、御射ら伊勢大廟に戦捷の御報告をなし給うた。その時 天皇は、

久方の天にのぼれるこゝちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

と詠ませ給うた。歡天喜地、御喜びの狀、一字一句の上に躍つてゐる。若し此の戦にして日露地を換へ、我が帝國が戰敗國となつたら如何に 天皇の御心中を拜察し、感涙の流るゝを禁ぜないではないか。

願ふに、日露の役に於けるわが大勝利の原因は、要する所、「日本魂の力」、たゞ是であつた。然るに今やいかに、眞に感慨に堪へざるものがある。あゝ日本の青年よ、結束せよ。祖國日本を救ふものは、實に君等を措いて外に無いのである。國の小弱なるを以て悲しむ勿れ、國軍の縮小を以て憂ふる勿れ。天下世界、たゞわれ獨り有する日本魂の威力は、是等を補うて餘あるではないか。結束せよ日本の青年！

心

八首

さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり

名高い御製で、實に古今の絶調である。歌の姿もさしのぼる朝日のごとく高朗潤達だ。かゝる爽やかな心を以て、學校生活に、家庭生活に、將た又社會生活に、國家生活に、日々を從事

したならば、人間到る所として可ならざるはなしである。人から愛せられ、親まれるのは、實にかゝる爽やかな性格の有ち主である。

ともすれば思はぬ方に移るかな心すべきは心なりけり

迷ひ易く、移り易きは、實に心である。特に自主的精神のまだ確立せぬ、誘惑に陥り易い、群衆心理に驅られ易い、青少年に於ては尙更で、深く心すべきである。

ことなしとゆるぶ心はなか／＼に仇あるよりも危かりけり

油斷大敵だ。西郷南洲先生曰く、「平時は戦争の如くし、戦争の時は平時の如くせよ」と。此の御製のこゝろである。「なか／＼」は、却りての意。

かざらむと思はざりせばなか／＼に美しからむ人の心は

何事も正直にてあれ、無邪氣にてあれ、天真爛漫にてあれ、さつぱりとして神のやうにてあ

れ、非を文り、偽を言ひ、虚飾・虚榮・強情を張るが、一番宜しく無い。との御心持から詠み出で給うた御製かと思ふ。此の「なか〜」も、前にいつた却りての意。

あさみぎり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ごもがな

天空海潤、光風霽月の心境にてあれかし。と歌ひ給うたもので、是れ亦千古不朽の大傑作たるを失はぬ。天高くして鳶の飛ぶに任せ、淵深うして魚の躍るに任す。大丈夫の襟度は、かくあらねばならぬ。

「おのが心ごもがな」は、淺みどりに澄み渡つた大空のやうな廣い、そして高朗な、爽やかな心を自分が有ち得て、日々仕事に従事し、又人にも接したいものであるとの意。

物毎にうつればかはる世の中を心せばくも思はざらなむ

世の中の事は、變轉極りなきもので、今日の失敗も明日は成功の本となり、昨日の禍も今日は又福の種となるもの、それゆゑたとひ、憂さ、つらさ、悲しい事があつても、心を廣く

大きくもつて、決してくよくよ思つてはならぬとの温かい尊い御訓である。「人間萬事塞翁が馬」。「禍福は糾へる繩の如し」。要はたゞ、一步を踏み出して奮勵努力するに在る。

廣き世にたつべき人は數ならぬここに心を碎かざらなむ

「數ならぬこと」は、下らないこと。何んでもないこと。物の數にも入らぬ小事・細事。

廣い世の中に立つて大に活動せんとする有爲の士は、小さい事に、くよくよして心を勞してはならぬとこれ亦有り難い御訓である。實際世に立つて活動せんとするには、時には思はぬ失敗もあり、衝突もあり、毀譽褒貶もありして、心を勞することが多い。されど、それ等は大業成就の前には、何んでもない小事細事であるから、そんな事に心を勞せず、意氣を沮喪せず、信する所に向つて、猛然奮然勇敢に戦つて最後の勝利を得ることが大切である。

集るご見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たる人心かな

集合離散、反覆常なき世の輕薄者の上を悲みて詠み給うたものと拜察し奉る。杜甫の貧交行

に、
穢ヒバ手作テレ雲覆リトヒバレ手雨ツ。紛々タル輕薄シツ何須ケンレ數ツカ。

君不ズヤレ見管鮑貧時交シツ。此道今人棄如ハレ土シ。

彼是思ひ合せて、感いと深い。

仁 慈 二一首

いつくしみ治かたかりせば唐土もろこしの野に伏す虎もなつかざらめや

博愛仁慈の尊い御製である。「もろこし」は、支那のこと。「なつかざらめや」は、なつかざらんや。必ずなつくといふ語。

仁慈の心、あまねく行き届いたならば、唐土の野に住んでゐる猛獸の虎でも、なつかないことは無い。まして況んや、斯の民をや。願くは有司百官よ、仁政を布いて、わが大御寶おほみたまを愛撫してくれよ。との御訓である。朝鮮・臺灣・樺太などの統治者は、特に金科玉條として奉體すべきである。

國のためあたなす仇かたはくたくとも慈いづくしむべき事なわすれそ

これ亦博愛仁慈の尊い御製である。敵を碎くは國家生存の爲で、これが爲には國力を盡し、民力を盡してもやらねばならぬ。されど、敵對行動をせぬものや、捕虜や、戰鬥力の無い老人婦女子などは、慈いづくしむことを忘るゝ勿れ。との大御心である。

この大御心こそ、實に神ながらなる傳統的わが國民精神であるのである。日本書紀、神武天皇生駒躰いこもとえの條に、

我は是れ日神の子孫、日に向つて虜を征つは、此れ天道に逆ふなり。云々。神祇を祭禮し、背に日神の威を負ひ、影のまに／＼壓おさひ躡ふまむ。かくすれば刃やいばに血ぬらずして、虜必ず自ら敗れむ、

と。血を流し屍を横へることは、たとひ敵にしても忍びなかつた。出来る限り徳を以て懐け、それでも聽かずに手向ふ時、始めて鋒刃を用ゐるといふが、わが日本精神である。八十梟帥を討ち給ふ條に、

我必ず鋒刃の威を假らずして、坐ながら天下を平けなむ。

と宣ひ、弟磯城を遣はし、利害を説いて兄磯城の降を勧め給ふ時。

可かずんば、兵を擧げて臨まむ。これ亦未だ晩からざる也。

と仰せられてゐる。景行天皇も、この精神を奉體せられ、熊襲征伐の時にも、

熊襲八十梟あり、衆類甚だ多く、其の鋒當るべからず、少しく師を興さば、賊を滅ぼすに

足らず。多く兵を動かさば是れ百姓の害なり。何ぞ鋒刃の威を假らずして、坐ながら其の國を

平けむ。云々。時に二臣あり曰く、熊襲に二女あり、之を納れて計らば、則ち曾つて刃に血

ぬらずして、賊必ず自ら敗れむ。天皇宣はく可也。

と。景行天皇の東夷征討の時、日本武尊に諭し給へる詔に、

之に示すに威を以てし、之を懐くるに徳を以てし、兵甲を煩はさずして、自ら臣順せしめよ

と、尊、頓首して賜ふ所の斧鉞を受け、再拜して奏したまはく、

今神祇の靈に頼り、天皇の威を借り、往いて其の境に臨み、示すに徳政を以てし、猶服せざ

るものあらば、即ち兵を擧げて之を撃たむ。

と。全くの徳教主義、徳治主義、仁慈主義である。此の仁慈は、一つは敵に對して、一つは戰爭によつて受くる人民の痛苦に對しての御慈愛である。

かゝる精神は、神功皇后の三韓征伐の際にも見られ、世々到る處にある。降つては、小楠公の渡邊橋に於ける敵兵の救護の如き、島津義弘が朝鮮征伐から歸つて後、敵味方の供養塔を高野山に建てたるが如き、彼の赤十字的博愛仁慈は、我が日本に於ては、神代からの傳統的精神として、上下三千年、天地の間に磅礴してゐたのである。

日清・日露の兩役に於て、捕虜に對する優遇の如き、伊東司令長官が敵の大將丁汝昌に對して、「武士の情」と打電し、携劍のまゝ降伏を許ししが如き、上村將軍が、肉を喰むもなほ且つあき足らぬ烏港艦隊を撃破しながら、其の將卒の救護に向つて至らざるなきが如き、幾多の美談は、皆我が傳統的日本精神の發露である。之を彼の歐洲大戰に於ける彼等交戰國軍の殘忍・慘虐、目も當てられぬ暴狀と、彼此對照し來れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

世界平和

五首

梓弓やしまのほかも波風の静なる世をわがいのるかな

戊申詔書に、

朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス

と宣はせられ 明治天皇の世界平和に御専念遊ばされることは、日一日のことで無い。此の御製は、明治三十五年日露の關係、日に非なるの時、「をりにふれて」の御述懐である。「梓弓」は「や」(矢)の枕詞。「やしま」は、大八洲國の略。やしまの外は、海外である。

此の頃、露國は、さきに遼東半島還附をわが國に強ひながら、己れ却つて之を租借し、旅順に難攻不落の堅壘を築き、烏 港 に東洋艦隊の根據地を設け、着々準備を整へて南下し、一舉韓半島を屠り、一路直にわが國に肉薄せんとし、東洋の風雲頗る急なるものがあり、國を擧げて人心恟々たる有様であつたのである。此の時に方り 明治天皇か如何に御宸襟を惱まし給うたか、伺はれて、畏しとも畏し。

四方の海みな同胞とおもふ世になご波風の立ちさわぐらむ

露の横暴は、遂に我に迫つた。我は自衛上、憤然起つて茲に砲火相見ゆるの止むなきに至つた。この御製は、明治三十七年、兩國開戦の初頭に於て、「正述心緒」といふ題にて、詠ませ給うたもので、平素各國との親交、世界の平和を念とせらるゝ 明治天皇か、如何に遺憾に御思召給うたかは、一首の上に躍如として、世界的・國際的、尊い御作である。「四方の海」は、四海萬國。「はらから」は、同胞兄弟。「波風の立ちさわぐ」は、即ち兩國戦端を開いて、世界の平和が破れたこと。「など」は、何故

へだてなく親しむ世こそ嬉しけれ鄰の國も事あらずして

「鄰の國は」、中華民國を指し給うたもの。支那も、この頃は國內無事で、御互心隔てなく親善の交を結んでゐるのは嬉らしいことであると、例の世界平和を愛好し給ふ大御心を反映し給うた御製である。

おのづからわが心さへ安からず鄰の國のさわがしき世は

「鄰の國も事あらずして」と喜び給うたのも東の間、忽ちにして此の御製を拜せんとは。實に支那國民に對して同情に堪へない次第である。「一將功成りて萬骨枯る」。動亂休まず四千年。これ支那開闢以來の歴史である。これといふのも、全く支那の國祖なる堯舜建國の精神が善くなかつた爲である。之を思へば、神國日本の國民は、實に有り難い。

久方の空はへだてもなかりけりつちなる國は堺あれども

平素世界の平和、國際的協調を念とし給ひし 明治天皇の大御心。此の三十一文字の上に流露して、實に高い、深い、厚い、大きい、人類最高善の象徴とも、神の御聲とも申し奉るべき大作にてある。

けに久方の空には、何の隔も區域も無い。青い雲、白い雲、自由自在に、悠々として飛んでゐるけれども、誰とて干渉し、壓迫し、之を咎むるものはない。然るに土なる國は、各々疆域を設けて割據し、虎視眈々、寄らば斬らんすの恐しい睨み合である。而して「日本人入るべからず」の制札は、世界到る處に立つてゐる。何たる狭い見苦しい人間の國ぞや。愛の教、人類愛の叫

び、今果していづくにかある。

「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇と爲さん」とは、神武建國の大精神である。東西文化を融合して打つて一丸とした世界最高の道徳を以て世界に君臨し、世界の私心私慾を抑へ、横暴を制し、以て世界人類の平和と福祉を増進せしむることは、實にわれ等日本民族の一大使命ではなからうか 明治天皇の大御心も、亦こゝにあるかと、畏れながら拜察し奉る。

奉 公 四首

身にあまる重荷なりとも國の爲人の爲にはいごはざらなむ

犠牲奉公の精神涵養を訓へ給うた尊い立派な御製である。國民としても、公民としても、犠牲奉公の精神より美なるはない。犠牲奉公の精神は、至誠熱烈な義務心から来る。権利のみを強調して、義務を忘れたる現代人は、實に禍なるかなである。

國を思ふ道に二つはなかりけり軍のには立つも立たぬも

「軍のには」は、戦場である。戦場に行つて戦ふ軍人も、國にゐて活動する銃後の國民も、何れも國を思ふ愛國心の發露で、忠義の道に二つは無い、との御仰せ。

これは、明治三十七年日露戦役中の御製で、當時軍人ならでは、忠君愛國は出来ないかのやうに考へてゐたものも多かつたので、その然らざる所以を、銃後の國民へ警告し給うたものと拜察する。世にも尊い御垂訓である。

おのが身はかへりみずして人のため盡すぞ人の務なりける

社会生活・國家生活に於ける犠牲的精神・奉仕的精神を鼓舞作興し給うた是亦尊い御製歌である。孔子曰く「身を殺して仁を爲す」と。又曰く「義を見て爲ざるは勇なきなり」と。皆この意である。

國のためいよくはげめ千萬の民もこゝろを一つにはして

億兆一心、協同一致、國の爲、社會の爲、大に力め勵み、以て大御心に奉答したいものである。

る。

務

三首

おのがじし務を終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ

「おのがじし」は、各自銘々。「花の陰に立つ」は、花見て遊ぶこと。各自銘々、己が一日の務を終へ、一週の務を終へてから、花を見、月を見、物見遊山をせよ。己が務をおろそかにして遊びにばかり耽つてはならぬ。「務め大事」。「勤勉第一」。との御仰せである。

花になり實になる見れば草も木もなべて務のある世なりけり

世には何等定つた職業を有せず、行ける屍走る肉、只だ父兄にのみ頼り、父祖の遺産にのみよつて衣食する遊惰の徒がある。これが人間第一の屑で、亦人間第一の罪惡である。この御製は、これ等の徒を誡め給うたものと拜察する。

一首の意は、草木でさへ、花を咲き、實を結び、人の爲、世の爲、それ／＼務があつて働いて

る。まして萬物の靈長たる人間に於てをや。願くは、おのがじし職業を有つて、國家の爲、働いて欲しいとの意である。

家富みてあかぬことなき身なりとも人の務に怠るなゆめ

是は「折にふれて」の御製であるが、彼の高等遊民の徒を誡め給うたものかと拜察する。家富みて飽かぬことなき飽食暖衣の身といつても、人の人たる職分は、夢々怠ること勿れとの御教訓である。

働くといふことは、實に人の天職である。精神的にせよ、筋肉的にせよ、働かない人は、人間の人間たる價値は無いのだ。必ずや身のほどくにつけて、金一文でも自ら生産し、米一粒でも自分で創造し、以て國家社會の爲に盡さねばならない筈のものである。然るに世には遊惰徒食・華奢淫逸、以て其の日を送るものが多い。世を毒し思想を悪化さすものは、多くは此の徒輩で、惡みても尙ほ餘ありと謂ふべしだ。世の有閑徒食の徒、願くは國家の爲、社會の爲大いに反省して貰ひたい。

修

徳

十二首

易くしてなし得がたきは世の中の人の人たる行にして

これは、實踐躬行を御獎勵遊ばしたもので、父母に孝に、兄弟に友に、といふやうな至つて易い手近な行でも、實行は中々困難なものだと御嘆息遊ばされ、だから、願くは各自努力して實踐躬行して貰ひたい。と御希望あらせられた頗る含蓄深い御製である。古より幾多聖人賢者の教訓は、此の行にある。孔子は「訥言敏行」といひ、「博學・審問・慎思・明辨・篤行」といひ、「行つて餘力あらば以て文を學べ」と訓へた。「知行合一」の實行主義は、王陽明の首唱するところ。御互聖諭の旨を奉體して、大いに實行に力めたいものである。

人みなを選びしうへに選びたる玉にもきずのある世なりけり

風誦三四、飽くを知らず。何とおやさしい、なつかしい寛容仁慈の御歌であらう。全く神の御聲である。

「良匠は朽木をも捨てず」。「完きを一人に求むべからず」。すべて人には、長あり、短あり、得手あり、不得手あり、そのほどくに善用するが、大人君子の事。「清濁併せ呑む」の雅量も此にある。

積りなば拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなる事と思へど

「悪は二葉に摘め」。「塵は日々拂へ」。積りなば拂ひ難く、成長しなば摘み取り難くなるぞ。との有り難い御教訓である。湯の盤の銘に、「日に新に、日に日に新に、日に又新なり」とある。御互心の塵も、身の悪も、日々拂ひ棄て、日々摘み取つて、改過遷善、以て日新日進の善行を積みたいものだと思ふ。

かりそめの言の葉草もこもすれば物の根ざしとなる世なりけり

口を慎め、「口は禍の門」との御訓。「かりそめ云々」は、何氣なく、不用意に言つたついで、つとの言葉でも意。「ものゝ根ざし」は、人の感情を害ふ本、人の恨の本、といふことゝ。言

の葉草」とあつて「根ざし」と受け給うたところ、修辭上の工、思ふべし。

爲すことのなくて終らば世にながき齡を保つかひやなからむ

「爲すことのなくて終らば」は、醉生夢死である。醉生夢死の徒が、如何に長生きしたとて、何の甲斐もないであらう。たゞ身のほどくにつけて奮闘努力し、以て國の爲、世の爲、人の爲、何なりと役にたつ仕事を爲したならば、たとひ三十で死んでも、四十で死んでも、それこそ却つて長生きしたものと謂ふべしである。との御意である。

實際、人の價値は、年齢の長短にはよらない。事業の大小、人格の如何によつて、論すべきものである。小楠公は二十三歳で戦死し、吉田松陰先生は二十九歳、キリストは三十二歳、アレキサンドル大王は、三十三で死んだ。而もいづれも皆千古萬古不朽の偉人である。彼も人なり、我も人なり、豈醉生夢死して可ならんやである。

白玉を光なしとも思ふかな磨きたらざることをわすれて

白玉は、もと美質である。磨けば磨くほど光を發する。人も亦性本善。學べば學ぶほど、光を發する。此の白玉を、我々人間に譬へ給うたのである。

一首の意は、我々人間は、白玉と同じく、磨けば磨くほど光を發し、學べば學ぶほど光輝を發するものである。然るに世の人は、學ばず磨かずして、成績が上らぬ、學業が進まぬといふ。誤つた考であると御諭し給うたのである。禮記に「王琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず」といひ 照憲皇太后の御歌に「金剛石も磨かずば玉の光は添はざらむ」と。訓へ給うたのも、同じこゝろである。

忍びてもあるべき時にこそすれば過つものは心なりけり

忍耐の徳、勘忍の徳を養へとの御訓。「忍びても云々」は、勘忍袋の切れさうでも、じつと忍んでゐるべき場合である。「ともすれば」は、どうかすると、忍び得ないで過つことがあるとの意。張良・韓信の故事など、耳に熟すれども、行ひ得るものは妙い。心すべきことぞ。

思ふこと思ふがまゝになれりこそ身を慎まむことなわすれそ

「思ふこと思ふがまゝになれり」は、得意満帆の時代である。此の得意満帆の時代に、事は必ず失敗する。「勝つて兜の緒を締めよ」。「満は損を招き謙は益を受く」。故に得意時代には、特に身を慎め。用心をせよ。と深く誡め給うたのである。

「ことそぎ」し昔の手ぶり忘るなよ身のほごくに家造して

「ことそぎ」は、事殺ぎで、質素のこと。「昔の手ぶり」は、上代のならはし、風俗。すべてに質素であつた上代のならはしを夢忘るゝことなく、家作りなども、身分相應にして、決して驕り資澤などせぬやうにとの御誡である。百億に垂んとする國債を背負ひ、國內的にも、國際的にも、經濟國難に直面してゐる吾等日本國民は、彼の獨逸人に見倣つて、質素儉約を専らとし國富を造らねばならない。

心ある人のいさめのことの葉は病なき身の薬なりけり

「病なき身の薬」。病氣があつて飲むのは、醫者の薬であるが、病氣のない身に飲む薬は、心ある人即ち同情ある益友・師長の諫の言葉である。「良薬は口に苦がけれど病に利あり。忠言は耳に逆らへど行に利あり」。よくよく服膺すべきである。

身にあまる重荷車をひきながらいそがぬ牛は躓かずして

諺に曰く、「急いては事は爲損ずる」。又曰く「急がば廻れ」と。御製の意もこれと同じで、まことに尊い訓である。今上天皇の朝見式の勅語にも、

進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ

と誠に給ふ。向ふ見ずの世の進歩主義の人々は、特に心して貰ひたいものだと思ふ。

つかさ人捧ぐるふみは多かれど花見るほどの隙はありけり

「忙中閑あり」といひ、「英雄別貯一團春」といひ、皆人間に餘裕あることの美を説いたのである。宵衣肝食、萬機に忙殺され給うた明治天皇の襟度、欽仰すべきではないか。十萬首に上る御製も、この忙中閑時の産物である。「司人云々」は、大臣達の捧ぐる政務上の文書。

反 省 三 首

己が身は省みずしてごもすれば人の上のみいふ世なりけり

これは 天皇或る日の御述懐である。目冀鼻冀を笑ひ、己が目にある梁を知らずして、人の塵を笑ふが、人の世の常である。反省の必要な所以を教へ給うた御製である。

わが心われごをりく省みよしらずくも迷ふことあり

これも「折にふれて」の御述懐である。親がわるい。兄がわるいと、人の上のみいふけれども、折々はわれとわが身を深く反省して見よ、知らず知らず自分の方が過つて居り、迷に陥つてゐることもあるものだ。と穩かに訓へ給うてある。

世の中を思ふたびに思ふかなわが過のありやいかに

これは、天皇御政治上の御反省である。維れ文維れ武、さながらなる現神にてましますわが明治天皇だに、尙且つ然り、ましてわれは、曾子の所謂「日に三省」すべきである。世の中を思ふたびに「世の中のことは、主として國民精神弛緩の問題、思想問題、經濟問題等、それ等の事を思ふたびに……」である。下の「思ふかな」は、わが身に反省して見るとのころ。

努 力 五 首

器には従ひながらいはがねもとほすは水の力なりけり

清新にして遒健。いはゆる丈あり、幅あり力あるの御作。何等の絶唱ぞ、何等の高調ぞ。ただく讚嘆の外はない。

眞の自由は、規範生活の中に於てのみ、始めて見出される。「うつはには従ひながら」と宣ひし

句は、即ち此の規範生活より得る自由の酵母である所の、従順・服従・守操・節制等の諸徳を意味した靜的勇氣である。「岩が根も徹す」は、勇敢・剛毅・忍苦・果斷・勇猛精進等の諸徳を意味した動的大活動である。

大にしては國憲國法より、小にしては校規團則の末に至るまで、又は父母の命令、師長の命令など、守るべく服従すべき道に對しては、恰も水の方圓の器に従ふが如く、自ら進んで遵守する従順の子、而も、其の爲すこと務むべきことに當つては、岩が根をも徹す大努力を以て、之を大成せざるば止まざるの大氣魄、蓋し天下の大男兒たるを失はぬ 明治天皇は、かゝる従順、かゝる勇猛精進をわれ等に望ませられて、さてこそこの御製となつたものと拜察し奉る。彼の我儘勝手や、過激放縱を以て、自由と思ふ徒輩の如き、三省すべきである。

冬ふかき池の中にもほごばしる水ひこすぢは氷らざりけり

これ亦世稀に觀るの大作である。「ほとばしる水」は、新陳代謝の大活動を意味する。逆つて活動する水は、冬深い嚴寒でも、決して氷りはせぬ。「流水腐らず」。「戸樞蝕まず」。人間大

活動の前には、天下何者か遮り得るものぞ。たゞ勇猛精進あるのみ。不斷の大努力あるのみ。

大空に聳えて見ゆる高嶺にも登ればのぼる道はありけり

これ亦天下の大作。「登れば登る」は、登つて見ようと思ふ意志だにあらばの意。精神一到何事か成らざらむだ。たゞ爲さざるに由る。爲さば必ず成る。斷じて行へば鬼神も之を避くるではないか。躊躇する勿れ、逡巡する勿れ。天下豈われを遮るアルプスあらんやである。

難しとて思ひたまば何事もなることはあらし人の世の中

難しとて思ひたまば、實に天下何事も成ることはあるまい。艱苦は天の試練である。苦勞は買つてもせよだ。來れ千辛萬苦。寄せよ狂瀾怒濤。限りある身の力ためさんかな。引込思案、優柔不斷、そは愚人の字書にある語だ。躍進！ 躍進！ 大躍進！！ 水火をも辭すべからず。かくしてそこに、名譽の殿堂、凱歌の星座はある。

むらぎもの心たゆまず進みなば嶮しき山も越えざらめやは

「思ふ念力岩をも通す」。屈せず撓まず努力邁進したならば、如何なる嶮山も突破して、目的の第一峯に立つことが出来る。「むらぎもの」は、心の枕詞。「心たゆまず」は、屈せず撓まずである。「越えざらめやは」のやはは反語で、越え得ざることは無い。必ず越え得るの意である。

親

一首

老の坂こえぬる子ををさなしと思ふや親の心なるらむ

老の坂を越えて、五十も六十もなつた子に對してだに、尙ほ昔のまゝに幼しと思つて、食ひ過ぎぬやうに、風をひかぬやうに、怪我せぬやうにと、心配するが親の眞情である。との御意である。此の御製は、上の句を、「ひとり立つ身となりし子を」と、世間には流布されてゐるが、後に御訂正になつたものと思はれる。今宮内省藏版に従ふ。

申すも畏けれど、此の御製、調といひ、内容といひ、實に千古の絶唱である。山上憶良の

しろかねも黄金も玉も何せんにもされる寶子にしかめやも
の如き、平兼輔が

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
の如き、紀貫之の

世の中に思あれども子を思ふ思にまさる思なきかな
の如き、萬葉作者しらすの

旅人の宿りせん野に霜ふらば我が子はぐくめ天の鶴むら

の如き、何れも代表的名吟ではあるが、この高雅深遠にして、常人の思ひ至らぬ親の極愛熱愛
・自然愛を歌ひ給うた御製には、到底及ばない。實に宇宙間第一の歌と感激し奉る。

子

三首

たらちねの親に事へてまめなるが人の誠の始なりけり

「まこと」は真心、至誠である。人の至誠が行に現はれたのが徳で、此の至誠を以て君に仕ふ

れば忠、親に事ふれば孝、夫婦には和となり、兄弟には友となり、朋友には信となる。親子は人
倫の始め、至誠を以て事ふるは、まづ親に始まる。孝は百行の本である。故に親に事へて孝な
るが、人の誠の始と詠み給うたものと拜察する。「たらちねの」は、親の枕詞。「まめ」は、まこと、忠實、深切。

たらちねの親の教をまもる子は學びの道も惑はざるらむ

里諺に「親の意見と茄子の花は千に一つも徒はない」とある。實際親の教訓、親の意見に徒
はないから、之をよく守つて身を律する子は、學びの道を踏み迷ふことは決して無い。尊き御
垂訓である。

たらちねの親の心をなぐさめよ國につこむる暇ある日は

是は、身のほどくに獨立して、國家社會の爲に働くやうになつた成人への御垂訓である。
とかく成人になれば、親を敬遠し、疎んじ、妻など迎ふれば、此の傾向が一層甚しくなる。賴

山陽が母を奉じて吉野の花を賞し、丹波の孝子蘆田爲助夫妻が、老母を車に乗せ、前から挽き後から推して、雪見に伴せるが如き、實に人の子の學ぶべき手本である。

兄 弟 一首

並び立つ丈は等しく見えながらこのかみは猶このかみにして

「このかみ」は、兄のこと。又年長者のこと。「並び立つ丈は等しく云々」と詠み出で給ひし所、奇想天外より來るの感がある。畏れ多けれども、兄弟を詠める古來百千の和歌中、未だ曾つて見ぬ大作である。

長を長とし、尊を尊とするは、社會秩序の基調である。而して此の長幼の序は、實に兄弟間の訓練より始まる。如何に身體のほどは、等しく見えても、或は大きくても、或は位貴くとも、兄弟は猶ほ兄弟である。何處までも兄弟として敬事すべきが人間の道である。此の禮、家に失へば一家亂れ、此の禮國に失へば、一國の秩序は亂れる。

學校生活に於ける高低の年級を指導し、長幼序禮の訓練をなすことは、現下の惡平等、惡テ

モクラシーの思想に對する最も大切な對症方法だと思ふ。然るに世には、階級などの聲に怯えて却つて之を抑止し撤廢し、長幼の序を亂す教育者さへある。不見識の甚しきものだ。

友 二首

諸共にたすけ交してむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

「むつびあふ」は、睦び合ふ。「世にたつ」は、世に立つて仕事をする上に、力となるの意。

「二人心を同うすれば其の利きこと金を斷つ」と易に在る。管仲鮑叔の交の如き、人間出世の本であり、一生の力である。

過をいさめかはしてしたしむが誠の友のこゝろなるらむ

「善を責むるは朋友の道なり」。御互過を諫めつ、諫められつ、切瑳琢磨の功を積むが、誠の友、心の友の眞情であるとの御意。

昭憲皇太后の御歌にも

誠もてまじらふ友はなかくにはらからよりもしたしまれけり
とある。いづれも尊い御歌である。

敬 老 二 首

年たかき人に授くる盃は手に取るごこに嬉れしかりけり

敬老尙齒の御思召から、九十以上の老人に御盃を賜はる。此の御製は、その時の御心持を歌ひ給うたものと拜察する。「とし高き人」は、高齢者。高齢の人に授くる盃は、手に取る毎に嬉しい。と仰せられた大御心、如何に老人をいたはり給ふかと、一首の上に横溢してゐる。

をさな子にひとしくなれる老人を勞るごこをゆるがせにすな

老人は、心もからだも衰へて。實際子供のやうである。よろしくいたはり慰めて、露、ゆるがせにすなどの御訓である。老人は過去に於ける功勞者であり、行末短き人々であるから、之を敬し之を勞るは、美しい人の行であり、子孫に取つては、大孝である。

幼 兒 三 首

いつはりの世をまだ知らぬ幼子が心やきよきかぎりなるらむ

「人の性本善」。眞に偽の世をまだ知らぬ幼子の心は、天真爛漫神の如くである。而もそれがだんく長ずるに従ひ、いつはり多き世の感化を受けて、知らず識らず、不正・不義・不善に陥るに至るのである。「子供は佛」の美と相俟つて、清き美しき御歌である。

いはけなく遊ぶ子供のさま見ればわれも幼くなる心地して

「いはけなく」は、無邪氣で、あどけなきこと。一誦三嘆を禁ぜざるの御高作、清高玄妙、神の御苑にでも逍遙するか心地がする。「われもをさなくなるこゝちして」の御聲、全くこれ天來の靈曲、鏘然として琴線の高鳴るを禁ぜぬ。孟子曰く、「大人とは赤子の心を失はざるもの也」と。此の言、畏れながらが 明治天皇を申し奉れるものか。

母が手にひかれて歩むうなるごのたち止りては莖つむなり

慈母と、うなる子と、春の野と、莖と。正に是れ一幅天使の活圖畫。「たちとまりては莖つむなり」。文字の美、小兒の美、動作の美。天下の貴も、富も、なほ如かずである。日本一の畫工をして、之を描かしめて置きたく思ふ。

生物愛護

六首

久しくもわが飼ふ馬の老いゆくが惜しきは人に變らざりけり

愛、禽獸に及ぶ深仁深慈なる 明治天皇の大御心の象徴として、感激に堪へないものである。あはれ、年久しく飼ひし愛馬の老い行くを、惜しくあはれと思ふは、人にかはらぬ。との大御心豈尊からずや。

夕日影かげろふ待ちて鞍おかむ駒も暑さに弱りもぞする

駒も暑さに弱るだらうから、夕日影の光が薄れて涼しくなつてから、愛馬に鞍おいて遠乗でもしようとの御仰せ。格調の上から申しても、内容から申しても、實に申分のない古今の名吟と拜誦する。「かけろふ」は、光が消えて陰になること。

籠の内に囀る鳥の聲きけば放たまほしく思ひなりぬる

「放たまほしく思ひなりぬる」との御言葉、何たる美しい御仁慈の御心ぞや。齊の宣王が「羊を以て牛に易へよ」との昔嘯も思ひ出されて、感いと深し。

ところせきふせごの内に鳴く蟲は選ばれたるや恨なるらむ

是亦微々たる蟲の上をあはれみ給うての御製である。「ところせきふせご」は、狭い小さい伏せ籠である。人にも此の類が多い。幸か、不幸か。

すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりて梅雨のふる

これは、魚に對する御同情である。池一面に浮藻が生ひ茂つた上に、毎日梅雨がふつて、氣もめいるやうであるが、そこに住んでゐる魚等は、さぞかし鬱陶しく悒鬱くあるであらうと。愛を魚の上にまで及ぼし給うた尊い御歌である。

おり立ちてごく打ち拂へ枝よわき小松の上に雪のつもれる

禽獸蟲魚に對する御仁慈は、更に非情な草木にまでも及ばせ給ふ。枝よわき小松のうへに、雪のふり積れるを御覽じて、疾く下りて彼の雪を打ち拂へ、枝のかよわい小松は、可愛想である。侍臣に命じ給ふの狀、目に見るやうで、畏しとも畏し。

教 育 七首

いさがある人を教の親にしておほしたてなむ大和撫子

立派な人格者を得て、教育の重任に當らせたいとの御希望である。「やまとなでしこ」は、日本の少年・青年にたとへ給ふ。「おほしたつ」は、養ひ立つ、教育し立つ。「いさがある人」は、

名譽ある人、立派な人格者、人の儀表たるに足る功勳ある人。「教の親」は、校長、教師。

天皇の教育に御熱心であらせられたことは、今更申すまでもないが、此の御製を拜し、冷汗背に冷く、恐懼にたへぬ。洩れ承る所によれば、この御製は、乃木大將を學習院長に御任命給ふ時、忝なくも大將に下し賜うたものだとのことである。

わけのぼる道のしをりさなる松は位なくても敬はれけり

教育者は、人爵の人にあらず、天爵の人である。大に自重して國民教育の大任に當つてくれよと、御激勵の御言葉である。「道のしをりとなる松」は、道しるべとなる松。即ち人の儀表であり、木鐸者であり、指南車である教育者にたとへ給うたのである。「位なくても」は、秦の始皇帝が松に大夫といふ五位の位を授けたといふ故事を思ひ出し給うて、たとひさやうな位はなくても、自然と世人から敬まはれる。實に神聖な高貴な職務であるとの大御心。我等教育者たるもの、徒に自卑し自棄して可ならむやである。

正しくも生ひ茂らせよ教草をここをみな道の別ちて

この御製は、男女の道を正しく分けて教育せよとの御教訓で、現代教育上最も注意すべき思想的重要な問題であると思ふ。特に男ともつかず、女ともつかぬ、外國かぶれの所謂モダンの徒の、大に猛省すべき頂門の一針である。

人としての人格に於ては、男女とも勿論平等である。されど、精神上・肉體上、男には男の適性があり、女には女の適性がある。其の適性に随つて、自然と男女の天職が定まり男女の道に区分がついて来る。然るに現下、此の男女の道が、漸次混亂しつゝあるは、實に悲しむべき國情ではないか。

わが國、神ながらの道は、男女平等で、同時に夫唱婦隨である。即ち人間として、又は國家社會の一員としての男女は平等である。たとへば、天照大御神の女性を以て高天原を知しめし天鈿女命・天石凝姥命が女性を以て天孫隨伴中の五伴緒中に列したるが如き、その例はいくらもある。

されど、夫婦となつて一家の人となつた以上は、夫唱婦隨でなくてはならぬ。その時は男女ではない。名さへ夫婦である。禮記に曰く、「天に二日なく、地に二王無く、家に二主なし」と是れ東西古今變ることなき萬古不易の天則であつて、亦人類社會當然の秩序律である。市長と助役は社會人としては平等の人格だ。されど、市といふ一つのサークルに在つて、自らの自由意志で進んで助役となつた以上は、市長に隨はなければ一市は治まらない。社員が其の社長に於ける、教師が其の校長に於ける、臣民が君主に於ける、皆唱と隨とでなくてはならない。この事は、諸・冊の尊いづなき いざなみが男女の道を行はせらるゝ左旋右旋の神事かんとくにてわかる。而るに世の學者は『文學士次田某、文學士木宮某の如き』是を以て男尊女卑の古俗といふ。愚も亦憐むべしだが皇道に男尊女卑の風は斷じて無い。あるのは皆外國傳來の思想である。男女といふ名は、社會的・國家的の名で、夫婦といふ名は家族的の名である。家族生活にあつては夫唱婦隨。國家社會の生活にあつては男女平等。これがわが國惟神の道である。されど此に注意すべきは、男女の適性上、男は外、女は内、男は多く生産に従事し、女は多く消費經濟の方面に力を盡すといふが、わが國の道德律であることを忘れてはならぬ。若し之に反する者あるが如きは、經濟

的一時の壓迫より生ずる變則であつて、善き人間生活といふことは出来ない。

よき種をえらびくゝて教草うるひろめなむ野にも山にも

「よき種」は、よい教材。即ち日本國民養成上のよい教材、よい教科書。「教草」は、上を承けて、選んだ上にも選んで教へ授けたい。といふ意と、教草即ち兒童・生徒・學生といふ意と、二つを含む。「植ゑひろめなむ云々」は、明治五年八月二日、學制頒布の時、仰せ出された書に「邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」と宣ひしは是である。

わがしれる野にも山にも繁らせよ神ながらなる道をしへ草

「わがしれる」は、天皇の知しめす國中といふ意で、朝鮮・臺灣・樺太等の新領土をも廣く指し給ふ。「神ながらの道」は、惟神の道で、神意のまゝの道。私心私慾のまじらない、又外來思想の混入せざる我が國固有の道。「道をしへ草」は、神ながらなる道を教ふるといふ意と、教草との兩方に懸けてある語。新領土に於ける教育者諸君の行くべき道は、自ら明瞭である。

新高の山より奥にいつの日か移し植うべきわがをしへ草

臺灣島の教育、特に蕃地教育に御軫念給ひての御製と拜察する。「わがをしへ草」は、日本的國民教育を新高山の奥までも施したいとの御希望である。

をしへある庭にさきたる撫子の花は露にも亂れざりけり

「賢母の下には賢子あり」。教や躰の行届いた家庭に育つた子弟は、行儀作法もよく、人品骨柄も何となくけ高くて、露の重きにも亂れず、雪の威にも屈せず、又事にあたつて、心を惑はし、徳を汚すやうなことは無い。御製の意は是である。高雅幽遠、風誦三四するに足る。

學問 九首

事しげき世にたゝぬまに人は皆學びの道に勵めこそ思ふ

「事繁き世に立たぬ間」は、職に就き、家を有ち、世の中の繁多な仕事にたづさはらぬ前、即

ち少年・青年の間のこと。まこと、青少年の間でなくては、十分な學問勉強は出来ない。「時に及んでまさに勉強すべし、歲月は人を待たず」。「少年老い易く學成り難し、一寸の光陰輕んずべからず」。心すべきことである。

こゝろざす方を定めてみな人の世にたつ道に惑はざらなむ

是は、目的を立つるの必要を訓へ給うたのである。目的なきものは、轡なき馬、舵なき船の如く、東西にさ迷ひ、南北に漂うて、到底彼岸に達することは出来ない。故に學を爲すには、先づ第一に目的を定めねばならぬ。目的を定むるには、能力・體力・資力、及び己が嗜好、己が適性の如何といふことを考慮して定むることが大切であるが、なるだけ志を遠大にし、天下第一の人物たむことを以て目標とすることが肝要である。「志す方」は、即ち目的で、「世に立つ道」は、將來の職業。即ち立身出世の道である。

半ばにて休ふことのなくもがな學びの道のわけ難しとて

折角目的を立て、學に就きながら、到底踏み分け難い遂げ難いとて、中途にして挫折し廢學し、千仞の功を一簣に缺くやうなことがあつてはならぬと、堅く誠め給うたのである。孟母斷機の教、以て見るべし。「無くもがな」は、無くて欲しいの意。

楨柱たてし心をうごかすな世には嵐の吹きすさぶとも

雄渾な大作である。かく半途に挫折し廢學するは、實に學者第一の罪惡であるから、一旦目的を立てた以上は、如何に嵐の吹き荒ぶとも、如何に狂瀾怒濤の逆巻き來るとも、決して心を動かすことなく、勇猛精進、自強息まず、以て之を貫徹せよ、との有り難き御仰せである。「楨柱」は、立つの枕詞。

世の中の人におくれをとりぬべし進まむ時に進まざりせば

進まん時に進まず、時に及んで勉強せざれば、一生涯人に後れを取るぞ、との御誠。

朝のまにももの學ばせよ幼子もひるは暑さに倦みはてぬべし

夏は、朝の涼しい間に勉強させよ、如何に子供でも、日中は暑さに堪へぬであらうと、吾等教師や家庭の人々に訓へ給うた御製である。御細心のほど、感すべしである。

秋の夜の長くなるこそたのしけれ見る卷々の數をつくして

天下の御政務に御寸暇だもあらせられず、ともすれば、御讀書も御意のまゝならざりし 明治天皇が、秋の夜の長くなるを樂ませ給ひ、夜の更くるをも知らで、讀書に耽り給ふの御實狀、實に見るが如く、畏しとも畏し。「燈火正に親しむべし」。我等學徒たるもの、奮勵せずして可ならむやである。

物學ぶ道にたつ子よ怠にまされる仇はなしと知らなむ

怠惰は眞に大敵。深く誠め給うたのである。「知らなむ」は、十分自覺せよとの御意。

いち早く進まむよりも怠るな學びの道にたてるわらはべ

進むに速かなる者は、退くことも亦速かである。たとひ遅くとも時計の針の如く、休まず、怠らず、着々進めとの御誠。易に曰く、「天行健、君子以て自彊息未す」と、兎と龜との昔噺など、思ひ合はすべし。

學

習

三首

よりそはむ隙はなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

學校生活を卒へ、社會に出で、活動する世の青年・處女・並に我々成人等に向つて、學問修養の大切なことを訓へ給うたまことに有り難い大御心である。

一首の意は、各自業務に追はれて、机に向ふ隙は無くとも、せめて机の上だけには、塵を据えないやうに、綺麗に掃除し整頓しておいて欲しいものであると、至極内輪に仰せられたのである。御互聖諭を奉體し、寸暇を偷んで讀書したいものである。

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

これは、主として地方にある男女青年及び成人達に向つて學問修養の大切なことを御諭しになつた御製かと拜察する。「おのが身を修むる道」は、即ち教育勅語を本とした學問修養。「しづがなりはひ」は、百姓・商人・職人・勞働者などの生業である。さういふ生業の爲に、たとひ隙はないにしても、おのが身を修むる學問修養の道だけは、學ぶやうに留意して欲しいとの御希望。地方の男女青年たちの暇のないには大に同情するが、願くは志氣を鼓舞し、晴耕雨讀、三餘の勤學など、切に祈る。

空蟬の世のこころわざは繁くとも物學ぶまのなかるべしやは

「空蟬」は世の枕詞。「なかるべしやは」は、ないことがあらうか、無い筈はないと反る語。前二首は、「隙は無くとも」「暇なくとも」と、至極内輪に仰せ給うてあるが、こゝには隙の無い筈はない。隙を見付けて勉強せよ、と強く仰せられてある。

前に言つた三餘といふは、夜と、雨の日、それから冬の農閑期のことである。此の三餘は田園青年修養の黄金期であるが、此の外、平素に於ても、爲さんと思ふ志だにあらば、隙はいくらも見出し得る。二宮金次郎のあの勤學の態度など思つて、大に奮勵努力すべきである。

人材登庸 二首

山のおく島の果まで尋ね見む世に知られざる人もありやこ

官武一途庶民ニ至ルマデ各々其ノ志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス
とは、明治維新の御誓文である。四民は平等に皇化に霑ひ、人材は普く登庸せられて、野に遺賢なし。といふ聖代であるにも拘はらず、尙ほ才あり徳あるの人にして、世に埋れて知られざるものはなきや、山のおく、島の果までも、尋ねて見むとの御思召。如何に 明治天皇が、廣く人材を登庸して、適材適所の善政を布かんの御志切なりしかが伺はれて、忝ない次第である。山のおく、島の果といふ御言葉に、深い意義があると拜察し奉る。

埋木を見るにつけても思ふかな沈めるまゝの人もありやと

この御製も、前と同じく人材登庸に就ての大御心と拜察し奉る。當路の君子、願くは、徒に學問・財閥・政黨閥等に偏することなく、人物本位の社會正義に立脚し 至公至平、廣く人材を拔擢登庸して、國務の進展を計つて貰ひたい。若し現今の如くにして推移せんか、思想は益々惡化し、人心は愈々倦み疲れて、國家の前途憂ふべきものがある。切に猛省を望む。

大臣以下の人々へ 五首

世の中の人の司となる人の身のおこなひよ正しからなむ

これは、總理大臣以下百官有司、市町村長、各種團體長等に下し給うた御垂訓である。「人の司」は、人の上に立つ人。

凡そ支配者となつて人の上に立つ人は、己が行を正しくし、自ら身を以て人を率ゐるの概がなくてはならない。「上の好む所下これより甚しきものあり」。上濁つて下清むの理なし。有司

の人々よ、願くは行を正しくして、衆に範を示して呉れとの御希望である。

伊尹は、湯の名宰相であつた。曰く、「予は天民の先覺者也。予將に斯の道を以て、斯の民を覺ますんとする也。予が之を覺ますに非ずして誰ぞや」と。孟子、伊尹を謂つて曰く、「天下の民、匹夫匹婦だも、堯舜の澤を被らざる者あらば、己推して之を溝中に内るゝが如く思へり。其の自ら任するに、天下の重きを以てすること、此の如し」と。堂上の諸君子、以て如何となす。

位ある身をわすれてや池の面の鱉は葦間の魚ねらふらむ

「位ある身を忘れて」は、五位鸞のことである。無限の寓意諷刺がある。葦は惡しに通ずる。ねらふ葦間の魚は何であらう。近頃位ある人々の上に就て、よからぬ報道をきく。卿等は、此等の御製を拜誦して何と感ずる。願くは世道人心の爲、再考三思して貰ひたい。

縣守こゝろにかけよしづがやの竈の烟立つや立たずや

是は、縣守即ち府縣知事への御警告で、「かまどの烟立つや立たすや」と、堂々と問ひ懸け給うた、所風發り雲湧くの概がある。一道三府四十三縣、乃至植民地に於ける地方官の人々よ、卿等の一舉一動・一張一弛は、直に府縣民の休戚に關し、民風の作否に關係すること、實に多大である。願くは 明治天皇の心を以て心とし、日夕府縣民の上に意を注ぎ、直き、淨き、明き政治を行ふべく、努力ありたいと思ふ。

むらぎもの心つくして縣守あをひこ草をおほしたてなむ

是も地方牧民官に對しての御述懐である。「むらぎもの」は、心の枕詞。「青人草」は蒼生で、人民のこと。「おほし立つ」は、養ひ立つ、撫で育つ。「なむ」は希望の詞。即ち心の限り盡して汝の管下の人民を養ひ立てゝくれとの御思召。

しづが上に心をこめて縣守たづきなき身をいつくしまなむ

是も同じく府縣知事への御希望である。「たづきなき身」は、便りなき身。即ち鰥寡孤獨の便

りなき人々の上に心をとめて、慈くしめよとの大御心である。

家 長 二首

眞木柱たち榮ゆるも動きなき家の主のあればなりけり

「眞木柱云々」。眞木柱の礎堅く一家が立ち榮ゆるの意。「動きなき家の主人」は、質實にして勤勉、しつかりとして物事に動ぜぬ家長。眞木柱、たち、動きなき、いづれも縁語。

「千生りや蔓一筋の心から」。家長の心一つで、一家の盛衰興亡が分る。ことに家長は、先祖に維ぎ、下子孫に繋る。家長の責任亦大なるかなである。

かりそめの事に心をうごかすな家の柱と立てらるゝ身は

これも家長に對しての御訓である。「かりそめ」は些細である。家の大黒柱と立てらるゝ身は些細なことに心を動かしてはならぬ。家長既に心を動せば、一家亦不安に憂はれる。故に細心にして勇氣があり、沈着にして果斷があり、どつしりとして物事に動ぜぬ修養が第一である。

「立ち寄りば大木の蔭」。頼み甲斐ある親であり、夫であり、家長でありたい。

一〇六

學 生 三 首

おこたらず學びおほせて古の人にはぢざる人とならなむ

「學生」といふ題にて詠み給へる歌。躍進・躍進・大躍進！ 脇目もふらず奮勵努力して、各自其の目的を達成し、以て昔の英雄偉人にも劣らない立派な人になつて呉れ。との御希望である。我が國の寶である満天下の學生諸君、願くは 大聖帝の御寄託のまに／＼奮闘し、以て他日聖旨に奉答する所あらむことを。「學びおほせて」は、學び終へて、成し遂げての意。

世の中の風に心をさわがすな學びの窓にこもるわらはべ

是も「學生」といふ題にて詠み給へる御製である。學生は學窓にあつて、専念學にいそしむべきものであるのに、而もその本分を忘れて、社會問題などに心を動かし、又は實際運動等に狂奔するが如きは、實に大いなる心得違ひであるぞよ。と深く誠め給うたのである。

開くれば開くるまゝに思ふかなあらぬ道にや人の入らむこ

「あらぬ道」は、異端の道、日本精神に反せる思想 明治天皇が思想問題に就て、いかに御軫念あらせ給うたかといふことも拜察されて、誠に恐懼に堪へない。世の學生諸君。須らく猛省して、彼の悲しむべき一部學生の徒に惑はさるゝこと勿れ。

卒 業 生 二 首

今はさて學びのみちに怠るなゆるしの文をえたるわらはべ

是は卒業生に賜へる歌。「ゆるしの文」は、卒業證書である。人間の教育は、一生を通じて爲さるべきものである。然るに世には、卒業證書だに得れば、是で我が能事畢れりと爲し、書物は閣上に束ねて復た顧みないものが多い。此の御製は、是等の徒を誠め給うたものである。

ゆるされて學びの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

世話・教護の行届いた學窓を離れて、荒波逆巻く世の中に出て行く卒業生の上を思ひやり給うて、御詠みになつた御製かと思ふ。「思はぬ道に踏みな迷ひそ」の御言葉、深く肝に銘して欲しいものである。「な迷ひそ」のなは勿れ。そは其れ。迷ふこと勿れ、それといふ意。

海外發展

二首

かぎりなき天つみ空はあしたづの翅を伸るところなりけり

海外雄飛の大意氣、大氣魄を鼓舞し給うた御製かと拜察する。堂々たる大作だ。

天下幾十萬の青年よ、君等は彼の人口問題、食糧問題、失業問題等を如何にする。これ未解決のまゝ君等に殘された大問題である。而して之が解決の鍵は、只一つある。曰く海外發展是のみ。されど憂ふるを休めよ、北へ北へ、南へ南へ。天がわれ等に與へた新天地は、汝の鶴翼を擴げるに餘りに廣大である。あゝ「人間到る處青山あり」だ。滿洲の廣野、シベリヤの沃土、乃至椰子の茂れる木蔭、橄欖の花咲く野末、彼の蠻女の蠻歌を聞くも、亦男兒の本懐にあらずや。行け！ 行け！ 日本の青年！！

大空を心のまゝにごぶ鳥もやごるねぐらは忘れざるらむ

「鷗鳥は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ」。人間豈故郷を思はざらんや。たとひ海外に渡航して、南洋王となり、南米王となつて、一大雄飛をなすとも、元の古巢を忘れてはならぬ。祖國日本を忘れてはならぬ。さりとして、又其の土の習慣・法律等に親します、頑固であつてもならぬ。要は郷に在つては郷に従ひつゝ、東方日出づる方に向ひ、遙に伊勢の大廟を拜し、祖先の墳墓を拜するの心懸が第一である。畏れながら、この御心持を御詠みになつた御製かと拜察する。

故

郷

七首

たらちねのみおやのまし、故郷の都はここに戀しかりけり

此の御製、天真爛漫、眞摯率直、洵になつかしき御歌である。世界の偉人大聖帝 明治天皇も、かくは小兒の如く故郷を慕ひ給へるか。「みおやのまし」の御言葉、殊に感深く侍る。

山城の都の空に照る月をおもひぞいづる秋のよなく
の御製の如き、又

山城の都いかにはるあき春秋の花に紅葉あきばにおもひやりつ、

の如き、

故郷ふるさととなりし都は萩の戸の花のさかりもさびしかるらむ

の如き、如何に 明治天皇が京都を慕ひ、舊都をなつかしみ給うたか。拜祭するだに、恐懼に堪へない。京都の花を御覽せられては、

ふるさこの花のさかりを來て見れば鳴く鶯の聲もなつかし

と喜ばせ給ひ、京都を出で立たせ給はんとしては、

わた殿わたのの下ゆく水みづの音ねきくもこよひ一夜ひとよとなりなりにけるかな

と無限の惜情を寄せさせ給ふ。ある時は、

ごほつ親の定めましつる山城のたひらの都永久とこひにあらずな

と。その愛着心の御深き、涙ぐましき程である。「胡馬は北風に依り、越鳥は南枝に巢すふ」。故郷を思ふは生物の自然である。而して人に在りて、此の郷土愛なるものは、やがて國家愛の基調を爲すことを思ふ時、我等はそこに重大なる意義を見出さざるを得ないのである。如何なる英雄偉人も、其の郷土を慕ふこと、恰も赤子が其の父母を慕ふが如く、故山に錦にしきを飾るは、實に人間一生の榮である。

明治天皇の京都を慕ひ給ひし御心情は、實に此の如くである。今や、御偉靈故山に歸り、御生前、特に愛で給ひしと聞くなる桃山の靈地に、長ながへに神鎮かみちぢりましますことゝなつた。神靈必ずや安んじ給ふなるべし。「萩の戸」は、御所内に在る庭坪の名、萩多しと聞く。「わた殿」は、渡

の廊下。「遠つ親」は、桓武天皇。「たひらの都」は、平安城、即ち京都。

花とリぐ

十首

ますらをに旗をさづけて祈るかな日の本の名を輝すべく

これは「軍旗」といふ題にて詠ませ給うたもので、典雅高邁、眞に立派な帝王の御製である。「祈る」は、神に祈るといふ意味でなく、心に祈念し祈願するといふほどの意かと拜察する。

忠勇義烈なるわが陸海の將校下士卒達は、此如き 天皇の御寄託を汚がさず、日清・日露の兩役、さては世界戦争、滿洲・上海兩事變など、實によく日本魂の威力を發揮して、大日本帝國の名を廣く五世界に輝かすことを得た。願くは今後も、ますます日本魂を砥礪鍊磨して、我が軍旗の名譽を、長へに世界に發揚すべく、努力して貰ひたいものである。

萬代の國のしづめと大空に仰ぐは富士の高嶺なりけり

富士山を詠じた歌は、名高い赤人の長歌を始めとして、世々の歌人の歌など、幾千百なるを知

らぬ。詩にも栗山・丈山・鳩巢・長齋の徒以下、是亦數ふるに暇がない。而も是等の多くは、いづれも山の高、山の大、山の靈、山の美、山の景を歌つたもので、「萬代鎮國の山」といふ意を歌つたものは無い。天皇の構想、流石は王者の詠である。崇高靈活、風誦三嘆を禁ぜぬ。

事しあらば軍の道に立たむ身は野をも山をも踏み鳴らさなむ

是は青年學生に對して、運動御獎勵の爲、特に「運動」といふ題にて詠ませ給うた御製である。「事し有らば」は、有事の時、一旦緩急あるの時、一旦緩急あるの時は、戰場に立たねばならぬ身であるから、平素山野を踏破して、身體を鍛練して貰ひたい。との御希望である。世の青年學生達よ、冀くは 天皇の大御心を心として、日夕運動を勵み、武道を練り、以て强健な體軀と、立派な精神の持主となつて、將來世界に雄飛するの素地を作つて貰ひたいものである。

子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのぶ櫻井の里

「櫻井の里」といふ題にて詠み給うただに、忝なきに、「松のしづくに袖ぬれて」の御言葉、

勿體ない程である。今、櫻井の里には、乃木大將の筆に成る「楠公父子訣別之處」の八大文字を刻せる一大豊碑が建つてゐる。是は辱知伊豆凡夫、畏友齋藤弔花等が至誠熱心の餘に成つたものである。弔花先づ頃來り告げて曰く、今回更に又東郷元帥の筆に成れる「子わかれ」の御製を刻せる一大石碑を建てむ計畫である。かくて 明治天皇を中心に、陸の乃木、海の東郷と相並べて、明治・昭和の一大記念物たらしめんと欲すと。美いかな君の舉や。楠公父子死して亦餘榮ありと謂ふべしだ。

うるはしくうね造りせる山畑になにの種をかしづはまくらむ

「農は國の大本」で、天祖天照大御神は、御躬ら御田作らせ給ひ、世々の天皇、亦農を尊び農を勤め給うた。今上陛下が、宮城内に稻田を作り、御躬自ら刈り取らせ給うたと洩れ承るは、神ながらなる勸農尊農の御精神である。明治天皇はいつの行幸にか、これを詠み出で給へる。美しく綺麗に畝を作つた山畑に、百姓が種を蒔くのを御目に留めさせられ、何の種か知らんと思ひ給ふなど、おなつかしくも亦欽仰に堪へない。叙景詩の上乗なるものである。

すなごりは子等に譲りて蘆の屋に網すく翁あはれ老いたり

この御製も、いつぞやの行幸に、目のあたり御覽遊ばしての御作かと拜察する。蘆の苫屋に獨りさびしく網をすきつゝある老翁に、無限の御同情を寄せ給ひたるの意、言外に溢れてまことに忝なし。

幼子のおひ立つ見れば老人は思ひのほかに変はらざりけり

「老人は思ひのほかにかはらざりけり」の御言葉、人の意表に出づ。實際三日見ぬ間に櫻かなで、子供の成長は驚くばかりである。それに比ぶれば、老人はさほど年はよらない。

しづのをが聲をま近く聞きてけり畑つゞきなる野べに宿りて

大演習などにて、行幸の折の實況にてやおはすべし、「賤の男が聲を間近く聞きてけり」の御言葉、帝王の御歌として、千萬無量の意義があるやうに思はれる。又如何に 天皇が嬉れしく

珍らしく聞き給ひしか、想ひやられて畏し。

いさみ立つ駒にくらおけ飛鳥山そめ始めたる紅葉見てこむ

これは 天皇三十二三歳の御時の御製であるが、「勇み立つ駒に鞍おけ」。「染め始めたる紅葉見て来む」など、字々飛躍し、句々鳴動してゐる。逸氣奔放・雄姿颯爽たる 明治天皇の高風、以て想見するに足る。何等の雄調ぞ。

乗る駒に小草はませてやすらへば鞍のうへ白く花ちりかゝる

繪にしたいほど、美しい御作である。時は、艶陽四月の天、所は、小金井清溪のほとり、水を夾むの櫻樹は、花雲十里、今や繚亂のまさかり。うらくと霞む春野の末には、鶯の如き遠山の浮ぶも見える。是等をバックにして、鐵蹄曼々、花塵を蹴立てつゝ閑に歩ませ給ふ白馬金鞍上の御一人、後へには従ふ幾騎の殿上人、しばしとてにや、樹下に駒を休ませ、折からの落花に對して見入り給ふの風情。見よ、花は風なきに繽紛として散りつゝ、駒の立髪、雪降り

かゝる。空には横ふ歸雁の一つら日は將に暮れなんとしていづこの寺の鐘ならむ、一杵又二杵。

拾遺 二十一首

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし蘆原のくに

これは、同心一體・舉國一致といふことを訓へ給うた御大作である。「かしの實」は、只一つあるより、一つの枕詞になつてゐる。「ひとつ心」は、一心同體・舉國一致である。「よろづ民」は日本國中の萬民。「蘆原の國」は、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國で、わが大日本帝國のこと。

一首の意は、全國の臣民達か、一心同體となつて、御國を護つてくれるのが、何よりも嬉しむとの御仰せである。御國を護るといふことは、陸海の軍人達が、國家の干城となつて御國を護るばかりをいふのではなく、銃後の國民が、御國の爲、天皇陛下の爲、各自その業務にいそしんで、富國強兵を計つてくれるのが、取りも直さず御國を護ることになる。「國を思ふ道に二つはなかりけり」と仰せ給うた大御心、即ち是である。

なりはひはよしかはるごも國民の同じ心に世を守らなむ

これも、前の御製とほゞ同じ意味で、各自の職業はよしや差別はあつても、國民の盡す忠誠まことに二つは無い。願くは、御國の爲に、世の爲に、協心戮力。舉國一致、以て此の世を護つてくれ、御國を護つてくれ。との御願望である。「なりはひ」は、人民の生業・職業。

くもりなき朝日の旗にあまてらす神のみいつをあふげ國民こゝろ

「朝日の旗」は、申すまでもなく、わが日章國旗である。「天照らす神」は、皇祖天照大御神。

「みいつ」は、御稜威で、御威光のこと。

一點の曇くももなく、旭光燦然として光り輝くわが朝日の御旗は、普く全世界を照らし、齊しく萬物に熱と光とを與ふる無量光・無量壽・智徳圓滿の太陽を象つたものであるが、その太陽こそ、即ち日の神にてましますわが皇祖天照大御神その御方であらせられるのである。故に朝日の御旗その物は、天照大御神の御相みすがたであり、同時にその無量光・無量壽・智徳圓滿の御神靈が

宿つて入らせられるのであるから、天照大御神の全身全靈の象徴しんごうとして、御稜威みりやういの光として、朝日の御旗を仰ぎ尊べ、我が日本の國民達よと、國旗の尊貴なる所以を御諭し給うた御製歌である。

天照大御神の御相みすがたを象り、天照大御神の御神靈を御宿し奉つた我が日章國旗は、同時にわが萬邦無比の國體と、わが國民精神とを象徴した世にも尊い意味深いものである。即ち赤は、日本國民の二心なき赤心・丹心・明かき誠の忠孝心を表はし、白は、太陽の明と・清淨潔白を表はし、中央の日の丸の圓は、圓滿具足の相すがたと、完全無缺の意を表はし、形の方は、端正・正義・公道・法則等の意を寓してある。

更に又わが國旗は、彼の外國の國旗などの色や意匠の複雑にして、くどくしきに似ず、頗る單純で淡泊あつさりとしてゐる。これは、亦我が言擧げせぬ國民性、何事も單簡・率直・赤裸々せきらくを尊ぶ國民性、なるべく議論や理屈を避けて實際に即して事を處理して行くといふ國民性、たとへば、國民歡呼の裡に欽定憲法を發布し給ひしが如き、談笑の間に江戸城明渡しを斷行せるが如き、我が國民性を象徴したものである。

かゝる尊き意義深い國旗であるから、之を取扱ふについては、餘程鄭重にし、之を仕舞ひ置くにも、亦十分氣を付けて不敬に涉らぬやうにせねばならない。歐米の諸國では、國旗尊重の念が頗る厚く、國旗に對する毎に必ず敬禮を行ふとのことであるが、國家觀念のより盛んな我が日本國民にして、國旗尊重の念の甚だ薄いのは、洵に恥づべきことである。

又國旗掲揚に就ての濫用が多い。釣魚池に毎日國旗を掲揚して看板代りにするものさへ往々見ることがあるが、之は特例としても、世には此の種の濫用が中々多いのである。國家的祝日・祭日の外は、餘程の場合でなくては濫用せないやうにありたいものである。これはお役人達の無理解から、濫用を人民に強ふることさへ多い。くれぐれも注意すべきことである。

われもまた更にみがかむ曇なき人の心をかゞみにはして

教育勅語に宣く「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其ノ徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」と。此の意味は、今此の勅語に宣べた所の國民道徳は、ひとり汝等臣民にのみ實行を強ふるものではない、朕も亦汝等と俱に之を實行し、君臣一體となつて、之が實踐發揮に努めたいと庶幾うて

る。との有り難き大御心である。之を君臣一徳と申して 明治天皇は、御躬ら率先して之を實行し給ひ、明治の臣民も亦之を實行したので、その結果、日清・日露の戦役を経て、世界一等國の班にまで躍進したのである。

右の御製歌は、此の君臣一徳の意を歌ひ給うたのである。即ち朕も亦汝等臣民と俱に、曇なき明かき・淨き・正しき古聖賢の心を手本として、今より一層わが心を磨いて、智徳の涵養に力を致さうと思ふから、汝等臣民も、之が實行に一層努力してくれとの御詠嘆である。

山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもごゐなるべき

日本魂の作用を的確に言ひ表はし給うた千古不朽の御大作と感深く拜し奉る。「山を抜く人の力」は、山を抜き崩すほどの偉大な人の力である。彼の軍神廣瀬中佐の如き、爆彈三勇士の如き、古人にしては、和氣清麿公の如き、楠公父子の如き、凡そ國家の爲、社會の爲、偉大な功を建て、偉大な力を用ゐた人々を指し給うたのである。

凡そこれ等の偉大な力は、何が原動力となり、如何なる石炭があつて、かくも燄々たる火光

を發するかといふに、これは取りも直さず、天皇中心・國家中心・忠孝一本の日本魂が、根本となり原動力となつて働くからである。天皇陛下の爲、御國の爲といふ心が、根本になり原動力となるが故に、茲に絶大なる勇氣が生ずる。絶大なる勇氣が生ずるが故に、茲に絶大な力となり、功業となつて表はれるのである。御製歌のこゝろは、即ち是である。「敷島の」は、日本の枕詞。

こる棹の心長くも漕ぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

隱忍持久を訓へ給うた御大作である。「蘆間」は、葦の生ひ茂つた入江で、船路には障碍の多いところ。世路の障碍・困難にたとへ給ふ。「漕ぎ寄せん」は、目的の彼岸に到着せん意。たとひ、世路の困難障碍はあつても、せかす、急がず、氣長く水棹を取つて、目的の彼岸に漕ぎ寄せよう。朕自身もこれを實行するから、國民も皆此の心持でやつて欲しい。との有り難き御掟である。「急いては事を爲損ずる」。一歩々々大地を踏み占めて、隱忍持久、着實に堅實に行くが、處世の妙諦である。

川舟のくだるは易き世なりとて棹に心をゆるさざらなむ

是は油斷大敵といふことを訓へ給うた御製で、一首の意は、川舟の下るが如く、とん／＼拍子にた易く事が運んでゆく世、即ち順境の時代でも、決して水棹のまゝに心を許して、油斷してはいけない。どんな暗礁や、どんな思ひ懸けぬ故障の起らないとも限らないから、しつかり水棹を取つて、過失の無いやうにとの御深切な御訓である。「治に居て亂を忘れず」。「百里の行程は九十里に半ばす」などの言、思ひ合はずべし。

草も木も萌ゆるを見れば春風に動かぬものはなき世なりけり

是は、「萬物感陽和」と題して、親和・和協・妥協・協調等の社會道德を訓へ給うた尊い御製歌である。

和煦たる春風が一たび吹き到れば、地上の草木皆一時に萌え出づるが如く、人間の世も、亦親和・和協の徳に因つて悉く動き、悉く蘇る。親和なるかな。和協なるかなと御詠嘆になつ

た御雄作である。

禮記に「天地和同して草木萌え動く」と見え、國語にも「和協輯睦、是に於てか天下興る」とある。聖徳太子も、憲法十七ヶ條の劈頭に於て「和を以て貴しと爲す。忤ふ無きを宗と爲す」と喝破し給うた。小は一身一家より、大は國家・世界に至るまで、人間生活上最も尊いのは、實に此の「和」である。

遠くとも人の行くべき道行かは危きことはあらしごぞ思ふ

「人の行くべき道」は、人の人たる道、即ち正義公道である。

たとひ道は多少まはり遠くとも、正義公道を踏んで行きさへすれば、決して危いことはあるまい。ゆめく道にはづれた行、禽獸の行をしてはならぬとの御垂訓。特例ではあるが、「濡れ手で粟を攫む」とか、「一攫千金」とか、「目的の爲には手段を擇ばず」とかの如き、よくない行である。諺に曰く「急がば廻れ」と。禮記に曰く「直情徑行は戎狄の行也」と。味ふべし。

進むにはよし早くとも危しと思ふ道には入らずもあらなむ

是も、前の御製歌と同じころである。一攫千金・濡れ手で粟式の危い道は、決して行くまじきもの。大西郷遺訓に曰く「正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先きに行けば、成功は早きもの也」と。是れ亦味ふべし。

嵐ふく世にも動くな人ごゝろいはほに根ざす松の如くに

「嵐吹く世」は、經濟國難・思想國難を酵母とせる現下の峻惡な世相の如き、或は紀元一千九百三十五年・三十六年を控へた國際的日本の立場の如き、それである。かくの如く峻惡な世相に直面して、如何なる誘惑に會つても、如何なる困厄に遭遇しても、決して心を動かし、あらぬ道に墮してはならない。恰も大盤石の上に堅く深く根を据ゑてゐる老松の如くに、操を守り節を持ち、泰然自若として、聊も動じてはならぬとの、尊い御訓である。

わが國體、わが歴史、乃至國民道德の如何なるかを十分認識して居れば、世の惡風潮に動き

迷はされることは無い。又わが國策、わが建國の大理想を遂行して、以て天業を恢弘し、天下に光宅せんが爲には、如何なる艱難も、如何なる犠牲も、決して意とするには足らない。毅然として、敢然として、之を貫徹せねばならぬ。要は、艱難に處して心を動かさず、天下安危の岐路に立つて、從容として之に善處するの度量あることが第一である。現下の日本國民に對するまことに尊い御訓である。

親のゆく跡を慕ひて雛鶴も庭のをしへや踏みはじめむ

學校教育・家庭教育の大切なることを論し給うた尊い御製である。「親」は、廣い意味に解して、學校教師をも含む。親の行く跡を慕ひて歩を學ぶが雛鶴の態度である。同様に、子供も亦兩親や教師の人格、行動をそのまゝ眞似るものであるから、よき手本を示して薰陶せねばならぬとの御訓である。

「庭のをしへ」は、庭訓即ち家庭教育のことであるが、廣く教育といふ意味に解してよい。「踏みはじめむ」は、學び始むるであらうの意。

むらぎもの心のかぎり盡してむわが思ふことなりもならずも

何事にも全力を盡してやれ、最善を盡してやれ。ベストを盡してやれとの御訓である。「むらぎもの」は、心の枕詞。「心の限り」は、精かぎり、根かぎり、至誠以て事に當る最善の努力をいふ。「てむ」は、して欲しいと望む意の助動詞。「なりもならずも」は、成つても成らないでも。即ち成功するも成功しなくもの意。

獅子は、兎を搏つにもなほ且つ全力を用ゐるとかや。彼の「雛助を割くにいづくんぞ牛刀を用ゐむ」などいふは、東洋流の豪語で、至誠着實の人の言ふことでは無い。たとひ思ふ事が成功するもしなくも、一旦事に當つた以上は、人事を盡して天命を待つに至誠を以て、精限り根限り全力を盡すが、眞に事業大成の本である。若し好い加減に、又棄て鉢的に事に臨んだならば、事はますます破綻を生じて、如何なる小事と雖も、成ることは無い。御製の御ころ、尊いかなだ。

天を恨み人を咎むることもあらじわが過を思ひかへさば

自己反省を御諭し給うた堂々たる御大作である。「わが過を思ひかへさば」は、己を反省して己が過と悟つたらばの意。

おのが過は棚に於けて置いて、人を恨み人を咎むるは、小人原のすることである。人を咎むる所では無い。己の誠の足らざるを咎めねばならぬ。まして況んや、「天道様も聞えませぬ」とか、「皇天果して是か非か」とか、「神も佛も無き世か」とかの、泣きごと恨みごとを並べることは、大男兒のなすべきことではない。

大西郷遺訓に「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を盡し、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ねべし」と、御製のこゝろそのまゝで、洵に天下の至言、反覆以て味讀すべきである。

塵ひぢのかゝる草葉に宿れども露の光は曇らざりけり

清逸・高雅、聖賢の矜持を道破し給うた御傑作である。泥池の中より出でてでも泥に染まず、清き池の漣に濯つても妖かす、どこまでも己を持して移らず、外物の爲に亂されざるが蓮の操である。「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、これをこれ大丈夫と謂ふ」。この襟度が大切である。

「露の光」も、亦これと同じく、清淨潔白の本性を固く持して、決して外物の爲に左右されることは無い。之を君子に譬へ給ふ。「塵泥のかゝる草葉」は、泥池や、清漣や、威武や、貧賤や富貴の如きもの。かゝる誘惑的外物の中に宿つてゐても、身を容れてゐても、決して染まらず移らざるが、露の光であり、亦君子の徳である。

又塵汚の懸つてゐる汚い草葉の上にも、なほ且つ宿る美しい露の光は、老子のいはゆる「和光同塵」の意で、自分の學問才能や、自分の位階勳などを鼻にかけず、衆と共に同じ、衆と共に手を握るといふ態度。今でいふデモクラティックよい意味での「な心術・態度が、即ちそれである。御製歌の旨、高く且つ深しと謂ふべしである。

淺しとて心ゆるすな雨ふればごみにあふる、山川の水

「淺しとて」は、力の弱いものに譬へ給ふ。「心ゆるすな」は、油斷する勿れの意。「ごみには」頼に、俄に。「雨ふれば」は、何か事件が起れば、激發することがあればの意。

これは、「河」といふ題にて詠み給うたものであるが、深き寓意のほどが窺はれる。

昭憲皇太后の

淺しとてせけばあふる、川水のこゝろや民の心なるらむ

の御歌も思ひ出されて、いと尊く拜し奉る。

御製の意は、力の弱い民衆だからといつて、無理に壓迫したり、又見縊つたり、油斷してはならぬ。一たび雨が降つて事件が勃發すれば、恰も山川の水の如く、俄に汎濫し横溢して、飛んでもない大事に至るものである。よくよく注意せよ。との御垂訓である。

左傾右傾に對する世の爲政者や、資本家や、地主や、學校當局やなど、當に三省すべき頂門の一針である。

覆ることもこそあれ小車の進むにのみはまかせざらなむ

進むにのみ任せたるは、馬車馬式の盲進で、轉覆の本である。是に於てか、孰慮斷行が大切である。即ち後を考へ、前を考へ、よく熟慮した上で、斷然奮進する。これが智者のする事である。「任せざらなむ」は、任せないやうにしたいものであるとの御こゝろ。「前者の覆るは後者の戒」尊い御訓である。

短しと思ふ心に冬の日はなか／＼ものゝはかごりにけり

奇想天外より來るの御歌。感いと深し。「みじかしと思ふ心」は、ぐづ／＼してゐては、すぐ冬の日は暮れて、仕事が拂らぬから、一氣にやらうと思ふ心、即ち油斷大敵と思つて、一所懸命になる心である。此の心があれば、短き冬の日でも、却つて事は拂るものである。親鸞上人の歌であるといふ。

あすありと思ふ心のあだ櫻夜半に嵐のふかぬものは

の意も宿つて、いと尊く拜せられる。「なかなか」は、却つての意。

なよ竹は素直ならなむ空蟬の世にぬけいでむ力ありとも

是は、婦徳を訓へさせ給うた御雄作である。「なよ竹」は、弱竹で女性に譬へ給ふ。「素直」はかざりけのないこと。心根の正しきこと。又しとやかにして逆らはぬこと。「空蟬」は、世の枕詞。「世にぬけ出でむ力ありとも」は、世の中の人に抜け出でた力、即ち學藝才幹が衆に優れてゐるもの意。

「なよ竹は素直ならなむ」と、まづ喝破し給ひしところ、筆力鼎を扛ぐとも申し奉るべく、百鬼夜行の今のモダンとやらに對しては、まさに三十棒に價する。昔にして紫式部、近代に於ては蓮月尼、明治になつては九條武子の如き、又申すも畏しけれども、日本女性中の最高峰に立たせ給へるわが 昭憲皇太后の如きは、實に其の人であると、畏れながら拜察し奉る。

印度の詩聖タゴールが、曾つて日本に來た時、日本婦人のなよやかな、しとやかな、そして犠牲的・没我的な美しい心を見て、世界女性中の第一だと褒めたゝへ、決して歐米の山猿式な

婦人を真似ね給ふ勿れと、一大警告を發した。世界的詩人であり文豪であるわが小泉八雲先生も、亦日本婦人―特にさむらひの女性を以て世界無比と賞讃し、自ら進んで日本のさむらひの出である一女性を娶られたのである。然るに現代のわが女性諸君の多くは、自らを卑下し、自らの衿持を失つて、例の山猿どもを真似て、山猿どもの奴隸となつて、得々としてゐる。あはれとや言はむ。不惑とや言はむ。

外國におそろぬものを造るまでたくみの業に勵めもろ人

これは、工業家に賜はつた尊き御製歌である。「たくみの業」は、即ち工業である。外國品に劣らぬ物を造り出すまでに、工夫研究を積み、創作發明を爲して、工業に力を致してくれ諸人よ。と御願望あらせ給うたのである。

この有り難い大御心のほどを、世の工業家諸君に、普く知らしめて、自給自足は勿論、どしどし外國に輸出して、以て御國の富を増進するやう、層一層の發憤を促したいものである。

盃を早く取らせよふりつもる雪ふみわけて人の参來ぬ

此の御製を拜誦して、私は何ともいへぬ一種のインスピレーションに打たれたのである。なんとおやさしい御心ぞや。なんと美しい人情美ぞや。是れ眞に佛の御聲であり、天來の神韻である。

此の「人」と仰せ給うたのは、國家の元老や、功臣や、大臣達であらう。降り積る雪を踏み分けて参來たから、さぞ寒むかつたであらう。さあ／＼早く盃を取らせよ。爛を熱くして、早く暖を與へてやれとの御仰せ。「早く取らせよ」の一語に、千萬無量の御仁慈と、御思ひやりの御眞情が流露して 明治天皇の美しい御人格と、早う／＼と左右を促し給ふ御面影とが、躍如として一句の上に躍つてゐる。

孔子が「吾が道、一以て之を貫く」と申された「忠恕」は、同情であり、思ひやりである。思ひやりは、人間第一の美德で、之を君に移せば忠となり、之を親に移せば孝となる。友・和・信・愛といふもの、皆この思ひやりから生れた美德である。孔子の道は、廣大無邊、大宇宙を包

む。而も「忠恕のみ」と謂ひしもの、所以あるかなである。

人は！ 特に人の上に立つ人は、此の眞心、此の思ひやりの心が第一である。此の心だにあらば、天下何物の剛と雖も、暴と雖も、決して敵するものは無い。御互、この「早く取らせよ式」の眞心を奉體して、世に處したいものである。

昭憲皇太后御歌讀本

昭憲皇太后御歌讀本

昭憲皇太后御歌讀本

目次

緒言	一
尊き道	三
尊き國	四
日本魂	二
孝	六
母性愛	五
友	二
御盛徳を讃へ給へる	八
聖上陛下を思ひ給ひて	九
御旅なる 聖上陛下を思ひ給ひて	二六
情景雙美	十二
菊花第一	二
御仁慈	十五
婦徳	三
心	四
弗蘭克林の十二徳を詠ませ給へる	六
諸徳	十六
教育	五
蠶業	一
商業	一

學問	四首	九一
讀書	三首	九四
軍事	十二首	九六
人事	二首	一〇四
海外の旅	一首	一〇四
治民	二首	一〇五
筆蹟	二首	一〇八
四季の折々	二十八首	一〇九
唱歌	二首	一一三
計	百七十八首	

昭憲皇太后御歌讀本

京都府立桃山中學校長 田中常憲謹著

東山三十六峯の青巒が蜿蜒として南に走るところ、宇治の流は洋々として其の麓を劃り、勢窮つて此に形勝雄偉の一大丘陵を形ち作る。これ即ち、一世の英雄豊太閤が雄圖の跡たる伏見桃山の靈地である。一代の明皇后わが 昭憲皇太后の尊き御靈は 明治天皇の御陵と相並んで、實に長へにこの靈域に神鎮りましましてゐるのである。

昭憲皇太后は、天資聰明・淑哲仁慈、坤德夙に中外に高くおはしまし、加ふるに窈窕の美、學藝の秀を以てし、内は陰政を發理して聖皇曠古の大業に翼參し、外は教育慈善の事業に力を盡して聖徳を無疆に輔成し給ひ、位に後宮にましますこと茲に四十有餘年、仁慈の澤四海に及び、關雎の化萬方に洽く、天下の民皆仰いで以て國母陛下と稱へ奉る。洵に婦道の龜鑑、母儀

の典型とや申し奉るべき。

此の明皇后 昭憲皇太后の宮は、故從一位一條左大臣藤原忠香公の第三の姫君にておはしまし、嘉永二年の春、さくら花咲く四月の十七日といふに、京都烏丸通東へ入る一條左大臣家の桃花殿にて御降誕遊ばさる。御幼名は勝子姫、後に富貴姫、又は壽榮姫と申し奉り、御入内の後美子と稱へ奉つた。

御生母は、一條家の典醫新畑大膳種成の長女民子と申す方にて、十六歳の時、一條家に出仕して花浦と稱へ、千代姫・多百姫・勝子姫の御三方を擧げ、安政五年九月十六日、三十九歳にて逝去された方で、容姿端麗にして、貞靜溫良の質を享け、讀書習字を始め、行儀作法に至るまで、洵に申分なき方であつたと承る。

御父君忠香公も、亦英明にして賢良、子女の教育に對しては、最も意を用ゐられたので 皇太后の宮は、おのづからなる平和郷、慈愛深き家庭に人とならせ給ひ、天成の御麗質と、天稟の御才徳とは、年と共にその輝きを發し給うたのである。

御幼時の學問は、從六位上小島右衛門大尉源永秀の妹隆子に就て、論語の素讀を受けさせら

れ、後貫名右近藤原祁に四書五經を、若江修理大輔菅原量長の長女薰子に和歌の御稽古を遊ばされた。中にも、此の若江薰子といふは、容貌こそ醜くけれ、天性賢明調達で、和漢の學に通じ、且つ勤王の志に厚い女丈夫であつた。薰子は、一條家の囑託を受けて、姫君達の御教養に全力を注ぎ、單に敷島の道のみならず、漢籍の御復習、諸禮式の御稽古、女儀一切の心得に至るまで、いと嚴格に御薰陶申上げたが、數ある姫君達の中、特に 皇太后の宮である富貴子姫は聰明穎悟に入らせられ、學問技藝にも特に秀でさせ給うたので 薰子は心から敬服し奉つてゐた。後年皇后御選定の時、一條家の姫君の中からの御内意あらせられた時、富貴子姫の賢明を説いて、極力御薦め奉つたのは、此の薰子であつた。

御琴にも、非常に御堪能にて遊ばされ、御師匠は、福永樂といふ盲人であつた。書道は、近衛家灑公の筆蹟を習ひ給ひて、是れ亦御熟達遊ばされ、その他繪畫・謠曲・能・生花・茶の湯等の末技に至るまで、御造詣深くおはせられた。

明治元年十二月二十六日、御年十九歳にて御入内。同月二十八日皇后冊立。茲に始めて明治天皇の御内助として、一天下の國母として、われ等億兆の上に臨ませ給うたのである。

御入内後の御學問は、八田知紀・高崎正風・近藤芳樹・元田永孚・細川潤二郎等の碩學たちが和漢洋の學を御進講申上げ、英語及び外國諸禮法等は、三宮式部官夫人（イギリス人）が主として御稽古申し上げたとのことであるが、才明利發で、暗記力に富ませられた皇太后の宮は、御進境頗る著しく、和漢の文學書は申すに及ばず、倫理・道德・宗教等の諸書も、普く御涉獵になり特に竹取・伊勢・土佐・源氏・平家などの物語類を御愛讀遊ばされ、中にも源氏物語の如き、最も御愛讀になつて、五十四帖中の和歌は、悉く御暗誦に相成つたと承る。

ことに和歌の道には、最も御心寄せ深く、御入内後は、若江薫子を始め、三條西季知卿・福羽美靜・高崎正風・黒田清綱等の大家に拜見仰付けられ、税所敦子・小池道子・下田歌子等も、亦御相手申し上げた。詠みおき給へる御歌の數は、約三萬餘首、之を淨書したのが、大冊二十六巻に收めてあるとのことである。

洩れ承る所によれば、御壯くわか入らせられた程は、一日に五十首百首も、御詠みになつて、左右の人々を驚かし給うたこともあつたが、後年は、御健康がとかく御すぐれさせ給はず、侍醫の御御めに由つて、心ならずも御節制遊ばされたとのことである。

それにしても、三萬餘首といふは、専門歌人だに及ばざるところ、此の點だけでも、女性歌人中、古今獨歩で入らせられるが、而もその詩名が世界的であつて、曾つては、瑞西ノベル賞金受賞候補者の一人として推され給ひしといふ點から見ても、亦わが國上下三千年の歌人中、誇るべき第一人と申し奉るべきである。

詩は、心の反映である。皇太后の宮の御歌風は、高調雄韻、至誠眞率、丈高く、奥深く、人界・自然界、宇宙萬象を悉く詠破して、前人未到の境地にまで達し給ひ、抒情・敘事、日に見、心に感じ給ひしことは、亦悉く歌となつて現はれ、而もその歌ひとつびとつが、尊い生命の輝きを見せて、千紫萬紅、花とりくの大觀を呈し、而も着想の奇、觀察の妙、實に他の追隨を許さざるものがある。

ことに我等の感激措く能はざるものは、聖上陛下の御上を思ひ給へる至情至誠の餘に成つた幾多の御歌である。宮内省が発表した「昭憲皇太后御集」の中に收めた御歌の數は、總計一千九十七首あるが、ほとんどその多くは、聖上陛下の御聖徳を讚へ、聖上陛下の御上を思ひ、聖上陛下に對しての御述懐及び御自省等で、涙なくては拜誦することの出来ない御作ばかり、眞に

女性の手本、婦人の鑑かがみで入らせられる。

次に尊く拜し奉るは、皇太子・皇太孫、その他内親王殿下の御上を思ひ給ふ母性愛の御歌、それから人の子として御親の上を思ひ給ふ孝道の御歌の如き、誠に人間至善至情の御發露で、亦皆涙なくては拜讀することの出来ない御作品である。

これ等を外にしては、二十七八年、三十七八年の兩役に關する軍事上の御歌が多數を占め、病める兵士、傷つける兵士、寒暑に難む兵士の上に、萬斛の御同情を注ぎ給へるなど、之を拜誦して、誰か感奮興起せざるものぞ。次に道德に關する御歌、教育に關する御歌、農事に關する御歌、慈善に關する御歌などが、多數を占め、特に敬神崇祖の御歌、御國を祝こほき給へる御歌、日本精神を詠ませ給へる御歌などは、燦然として光を放つてゐる。

その他、詠史に、時事に、國交に、産業に、凡そ人間生活の萬般に互りて、悉く詠み出で給はざるは無く、中にも、四季をりくくの御感懷を洩らし給へる御歌、大自然を詠み給へる御歌など多く、いづれも皆堂々たる天來の御大作で、たゞく驚嘆の外無いのである。これ等は皆、天授の才と、御心情の優雅高朗なるとに由るにあらずんば、能はざる所である。

更に申し添へる事は、御文章に秀でさせ給うた一事である。御集に載せまらせたものでも、茨木縣下に於ける近衛師團の大演習に、聖上陛下の御伴して、御陪觀遊ばされた長文の御紀行文を始めとして、「野分のおした」、「秋情」、「觀菊宴」、「時雨ふる日」など、二十二篇もある。いづれも才華煥發、詞藻絢爛、斐然として章を成してゐる。彼の「金剛石」、「水は器」の二唱歌の如き、亦天下の名品である。

之を要するに、昭憲皇太后の宮は、國母陛下として、皇后陛下として、人の母として、又人の子として、而して一個の御女性として、何一つ缺くる所の無い立派な御方にてましました。これ等は、皇太后の宮の御事蹟を洩れ承つても拜察し奉る所であるが、一部一千餘首の御歌は遺憾なく之を物語つてゐる。

明治天皇の御製は、約十萬餘首と洩れ承つてゐる。而してその多くは、國を思ひ、世を思ひ道を思ひ、民を思ひ給ふ經世濟民の御聲であり、修身・齊家・治國平天下の御訓おんしんであつて、流石は帝王の御詠として景仰讚嘆指く能はざる所であるが、皇太后の宮の御歌は、明治天皇の御聖德を顯揚し給ふと同時に、御聖旨を奉體して、これを補翼助成し給ふ御坤德の御發露にある。

故に 明治天皇の御製が、教育勅語及び世々の御聖訓を敷衍し、昭示し給へる一大經典であるならば、皇太后の宮の御歌も、亦 明治天皇の御製と相表裏した千古の一大明訓たるを失はぬ 明治天皇の御製を太陽とすれば 昭憲皇太后の御歌は、正に月であらねばならぬ。日月天に位し、兩位桃山の靈域に神鎮まりましまして、以て長へに國民を薫化し、世界人類を指導し給ふ。誠に尊き極である。

坤圓球上、神國日本あり、日本に聖天子 明治天皇おはします。而して 明治天皇に配立して、我が國上下三千年、未だ會つて見ざる明皇后にして一大女性にてましましたわが 昭憲皇太后が在らせ給ふ。これ實にわが日本民族の大いなる誇であつて、同時に亦人類史上會つて見ざる一大異彩と謂ふべしである。

謹解し奉る所の御歌、一百七十八首、こは唯全豹の一斑、亢龍の片鱗に過ぎぬ。況んやまた 盡もて大海を測り、燕雀の鴻鵠を論ずるに於てをや。あなかしこ。

尊 き 道 三 首

君臣のたゞしき道もかし原の宮のむかしや
はじめなるらむ

法と・徳と・主・師・親との最高峯に立たせ給へる大日本の 天皇陛下。此の尊き 天皇陛下を中心として、恰も向日葵の花が太陽に向つて傾くが如く、億兆の民、悉く 天皇に向ひ 天皇に臣従し 天皇に奉仕し奉り、所謂忠孝一本・皇運扶翼の―理窟でなく、義務でなく、法律關係でなく、親子的自然の切情に發するもの―臣民道。而して之に對し、國を以て家となし、民を視ること子の如く、樹徳深厚・仁慈一途の―君道とか、王道とか、皇道とか、即ち道と名づくべきものでなく―自然に發達した主・師・親の大恩情、此の大恩情と彼の親子的切情と相結合して、天皇はわれ等を大御寶と呼び給ひ、われ等は 天皇を現神と讃へ奉り、建國三千年を通じての上下一貫の大精神は、渝ることなく變ずることなく「列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ治

ク、兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉ジ、上下感孚シ、君臣體ヲ一ニス。これをこれ我が君臣の正しき道と申すのである。

この大道は、天照皇大神が、皇孫天津彦彦火瓊杵尊に天位を傳へ給ふ時、三種の神器を授けて宣く「豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり」と詔り給ひ、天兒屋根命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉屋命等、八十萬の神を從へさせ給ひて、日向の高千穂の宮に天降りさせ給へば、出雲なる大國主神を始め、諸々の神達、皆歸順し奉り、猿田彦命、その他の國つ神達も、亦皆道に御迎へ奉りて、茲に君臣の分儼然たる天壤無窮の基は開かれ、かくて神武天皇が橿原の宮に都を定め給ひて萬民の上に神位を正し給ひし時、始めて之が大成を見たのである。帝國憲法の第一條に

「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇ヲ統治ス」といひ、第十一條に「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」とあるも、亦神武天皇以來の古制である。右の御歌は、此の國體の大本、君臣の大道を歌ひ給へる、洵に尊き御作と拜察し奉る。

かへりみて心に問はゞ見ゆべきを正しき道に 何まよふらむ

正しき道は、教育勅語に宣ふ所の「斯ノ道」である。「斯ノ道」たる、實に一筋道の坦々たる大道である。それに何故踏み迷うて横道には入るぞと、嘆かせ給うた尊き御歌である。

「心」は、良心である。人、白痴瘋癲にあらざるよりは、誰か良心なからむ。而して良心は、是非・善惡・正邪を辨別するものなるゆゑ、良心に問はば、正しき道はわかるのである。故に「省みて心に問はゞ見ゆべきを」と、喝破し給うたのである。

小は日常瑣末の行爲より、大は國體、君父の大道に至るまで、何んぞそれ正しき道を踏み迷ふ徒の多きや。浩歎に堪へぬ。

思ふこと言ふこと道にあたりなば神の心も 動かざらめや

「道にあたり」は、人間の道、斯の道に、はづれないこと。「動かざらめや」は、動かざらんや

に同じ。思ふこと、言ふこと、すべて道に違はず、一言一行、悉く道德に適うてゐたならば、神様とても、などか感動し給はざる。況んや人間をや。されば、身を修め、徳を養つて、神人一如 神人交感の境地にまで達するやう努めたいものだ、との尊い御訓である。

尊 ぎ 國 四 首

君臣の道あきらけき日の本の國はうごかじ
よろづよまでに

君臣の道は、前に述べた如く、天皇中心の奉仕的絶對道、仁慈一途の尊きわが皇道である。此の君臣の道明かな日本國は、萬世までも動くまいとの御仰せであるが、まことに然りで、若し萬一、君臣の道が暗闇になり、大義名分が地を拂ふやうのことがあつたならば、日本國は、遂に崩壞の外は無い。明治二十二年の御作であるが、今日醞釀しつゝある危険思想に對して、鐵案を下し賜ひし如く思はえて、感いと深く侍る。

天つ日の照らすごとくくまなきはすめら

御國の光なりけり

大日輪の隈なく大地を照らすが如く、國光五世界に輝く我が大日本帝國を讚美し給うた麗はしき御歌である。

幾千代と限りもあらししろしめす豊葦原の

國のさかえは

これ亦、御國を嘆美し給へる尊き御歌。「しろしめす豊葦原の國」は、天皇の治め給ふ大日本帝國のこと。

眞心をぬさとたむけて神垣にいのるは國の

榮なりけり

これは、「社頭ノ述懐」といふ題にて詠ませ給うたもので、「ぬさ」は、神に獻る御供へ物。み

てぐら、にぎて、御幣のこと。「神垣」は、單に神といふ意。神に奉るぬさは持參せざれども、わが真心をぬさがはりに手向けて御祈りをするが、そは一身一家のことではない。實に御國の繁榮これのみであるとの、尊き國家愛、祖國愛の御歌である。

右四首、いづれも、千歳に傳ふべき御傑作と拜し奉る。

日本魂 二首

たのもしき何はあれどもたゝかひにかたて
はやまぬ大和だましひ

頼もしいと思ふものは、世の中に澤山あれども、戦争に勝たなければ死すとも止まじ。と思ふわが大和魂ほど、世にも尊く頼もしいものは無い。との御仰せである。

人あり、若し吾に向つて、君の國で一番尊いものは何だ」と問ふものがあつたなら、私は言下に答へる。「そは爆弾三勇士の精神である」と、此の精神こそ、實にわが建國以來三千年を通し

て一貫した 天皇中心・祖國中心の大精神であつて、此の精神があるが爲、内は燦然たる文化を建設し、外は外敵を膺懲して國威を五世界に輝かし、以て隆々たる今日の國運を見るに至つたのである。萬一我が國から此の精神を引き去つたならば、残る所何ものぞ。それこそ支那にだにも劣る衰れなる弱國。となつてしまふより外は無いのである。

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、願みはせじ。

實に萬邦無比、渾圓球上只わが日本のみが獨り有つてゐる尊い精神である。此の精神を大和魂といひ、日本魂にっぽんこんといひ、皇道精神といふのである。男も、女も、老も、若きも、ますく之を鍛練し作興して、舉國一致、平時には各々その職業に、戦時には全身全靈を捧けて軍事に盡したるものだと思ふ。

うつろひし色を見せじとはるかぜに散るや
櫻のこゝろなるらむ

此の一首、姿も、調も、内容も、共に古今に冠絶した、むしろ空前絶後とも申し奉るべき御

傑作と感深く拜し奉る。何となれば、これ實に我が武士道精神の或る美的方面を遺憾なく道破した御歌であればである。

「移ろひし色を見せじ」は、變り果てた汚い顔、姿を人に見られまいとの嗜みで、是が即ち伊弉册尊いざなのみかみ以來の日本魂、日本武士道の華であるのである。

伊弉册尊が、黄泉の國に到りました時、男神なる伊弉諾尊いざなのみかみに身の穢けがれを見せじと思ひ給ひ、「な見給ひそ」と宣ひしは、即ち此の「移ろひし色を見せじ」との御心である。

鎌倉三代記に、三浦之助が、兜に名香なまかぐを薫くもらしたるを見て、時姫が、今宵討死と悟つて、袂たもとに縋すがつて泣いたことや、一の谷の合戦の時、平敦盛が薰物のえならぬ香に、流石の熊谷も感心したといふことや、平知盛が將に壇の浦の花と散らんとする際、そこ拭へ、こゝ拂へといつて、船中隈なく掃除させたといふことや、石田三成が、いよゝ陣歿といふ期に臨んで、汚い物を排出してはとの心から、勧められる食物を取らなかつたといふ事や、日露戦争の際、大庭大尉が、香水をぶん／＼させながら敵陣に突貫したことや、皆此の美しい武士道精神の發露である。

私は本居宣長翁の「朝日に匂ふ山櫻花」の歌と共に、この御歌をわが國民歌として、天下に推

奨すすめたいものだと思ふ。

孝 六首

しぐれするよはの寒さに思ふかなは、その

森の陰はいかにと

「雨夜思ツツ人」といふことを詠ませ給へる御歌である。「は、その森の陰」は、柞はたきといふ木の森陰で、母といふ意である。森の陰は、單に森といふほどの意。しぐれの雨の降つて寒い夜に、ふる里にまします母君を、如何におはすらむと、思ひわづらひ給ふのである。

親の子を思ひ、子の親を思ふは、人間自然の本性である。されど、親ほど子は思はない。是に於てか、聖人は孝經を作り、白樂天は燕の詩を作つて歎息した。思はざるべけんやである。

は、そばの惠のつゆをうけながら子の道は

まだつくしかねつゝ

至孝至徳の 皇太后の宮にして、猶ほ且つ「子の道はまだ盡しかねつ」と御嘆き給ふ。不徳のわれ等、それ如何ぞや。

めづらしき花を見るにもたらちねの世にし
あらばと思はるゝかな

花を見ては父を思ひ、月に對しては母を戀ひ、おいしい物、珍らしい物を食べるとは、み親を思ふは、孝子の至情である。「世にしあらば」の御言葉、涙なくては拜誦出来ない。

たらちねの今もいまさば大御代のさかりの
花も見せましものを

これ亦、孝子の至情である。「大御代のさかりの花」は、燦然たる明治の文化文物、五大強國の一なる大日本帝國の赫々たる國光。それを見せて上げたいとの御心、尊からずや。

里居^{さきみ}せし昔は夢となりぬれど親のいさめは
忘れざりけり

父母の家に在りし往事を思へば、茫々として夢の如しである。されど、至れる慈愛を以て、親切に御訓へ、御諭し給はつたみ親の意見諫言は、今になつてもさら／＼忘れることは無い。まことに有り難く思ふとの御仰せである。一讀三嘆を禁せず。女性諸君は、感殊に深かるべし。

なほざりに聞きて過ぎにしたらちねの親の
いさめぞ今はこひしき

かく尊いみ親の意見諫言も、若い時分は、兎角心にも深く留めず、動もすれば等閑^{なほざり}に聞き過ごして來たけれども、今になつて思へば、一言一句、切々として心に感じ、胸に答へて、洵に有り難く忝なく、戀しき限りであるとの御述懐である。

「樹靜まらんと欲すれども風やまず、子養はんと欲すれども親待たず。往いて來らざるものは

今なり。再び見るべからざるものは親なり」と古人は嘆き、「親の意見と茄子の花は千に一つもあだは無い」と、俚歌にも訓へてある。人の子たるもの、夫れ思はざるべけんやである。

母性愛 五首

大君のみ苑のたづもけふよりは二葉の松の
千世にともなへ

これは、明治十二年八月三十一日、皇子明宮(大正天皇)御降誕につき、「鶴契三千年」といふ題にて、皇子の千年を壽ぎ給へる御歌である。

「二葉の松の千世に伴へ」は、皇子千年の御伴侶になれとの御こと。尊い御歌である。

雨につけ嵐につけてみほのうらのこまつが
上を思ひこそやれ

皇子明宮の清見潟にましましける頃、御詠みになつた御歌である。此の時皇子御年十一歳。尊き暖かき母性愛が、煌々として一首の上に光を放つてゐる。

ゆあみするあたみの里をあたゝけみ小松も
千代の色やそふらむ

これは、明治二十三年、東宮御年十二歳の時、熱海にましましける頃、詠み出で給ひける御歌「小松も千代の色や添ふらむ」と、喜び給ふのさま、見るが如し。

いかにもつねは思はぬ山々の心にかゝる
雨のおとかな

明治二十九年、東宮御旅に出で給ひしに、一夜いといたう雨のふりければ、案じわづらひ給ひて、詠み出で給へる御歌。「こゝろにかゝる雨のおとかな」の一句、御案じのほど、至慈・至愛の極致である。

旅衣かへりて見れば御子たちの車やどりに
むかへましたる

是は「うれしきもの」と題して、詠み出で給へる御歌。燒野の雉子、夜の鶴、貴きも賤しきも、親子の情に變りは無い。感いと深く拜誦し奉る。

皇太后の宮の御樂は、皇子・皇孫及び内親王殿下達の立派に御成人遊はされることであつたと洩れ承る。従つて各宮殿下の御教育に對しては、一方ならず大御心を注がせ給ひ、御學問上のことは申すに及ばず、手工・御手習・御歌・行儀作法の末に至るまで、細心の御留意を以て憐はせ給ひ、御成績品を御覽じては、いつも必ず御褒美を賜ひて、御獎勵に相成つたと承る。

ことに、皇太孫殿下、即ち今上陛下の御教育には、特に御力を注がせ給ひ、しばし學習院に行啓相成つて、親しく御授業の御模様を御覽せさせ給ふなど、その御心盡しのほど、尋常ではなかつたと拜聞し奉る。かの乃木大將が、自刃に先だちて中朝事實を殿下に獻上せられた時、大宮は殿下を御傍近く召し給ひて、「乃木がどういふことを申したか。一度御祖母様にお聞

かせなさい」と仰せ給へば、殿下は御眼に一杯涙を浮べて、「今申上げると、悲しうなりますから、どうぞ暫く御待ち下さい」と御答へになつたといふ。その大御心を用ひ給ふことの深き、左右の人々は、いつも感涙に咽んだと、聞くだにも畏し。

友 二首

信もてまじらふ友はなか／＼にはらからよ
りもしたしまれけり

「兄弟は他人の始」といふ諺もあるが、信を以て交る親友、腹心の友、斷金の友、刎頸の友、といふものになると、兄弟よりも却つて親まれもし、亦頼み甲斐もあるものである。御歌のころも亦こゝにあるか。「なか／＼」は、却つての義。

よき友にまじはる人はおのづから身のおこ
なひも正しかりけり

諺に「水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による」といひ、「朱に交れば赤くなる」といひ、「牛は牛づれ」といひ、「蓬麻よもぎ中に生ずれば、扶けずしておのづから直くなる」といふ。「水は器」の御高作をも、よくく玩味せられたし。

御盛徳を讀へ給へる 八首

しろしめす國ひろまれどみめぐみの露には
もるゝ民草もなし

「仁」といふ題にて 聖上陛下の御盛徳を讀へ給へる御歌。堂々たる御大作である「しろしめす云々」は、朝鮮・臺灣・樺太等、新にわが版圖に入つて、聖上陛下の治め給ふ領域の廣まれるをいふ。「みめぐみの露云々」は、治く皇澤に霑ふこと。

國といふ國のはてまで照らす日は君がみい
づにひとしかりけり

大日輪は、限なく三千世界を照らす、我が 天皇陛下の御稜威も、亦治ねく六合を照らし、五世界を照破す。偉ならずやとの御歌。

天つ日の照らさむかぎり神かぜやみもすそ
川の末はにごらじ

「河水久澄」といふ題にて、詠ませ給へる御歌。「天つ日の云々」は、天壤無窮のこゝろ。「神風」は、伊勢の枕詞。轉じて五十鈴川の別名である御裳濯川の枕詞。御裳濯川は、倭姫命やまとひめのみことが穢がれた御裳を濯ぎ給ひしといふ傳説から起つた名で、此の川のほとりには、天祖天照皇大神を祀つてあるので、皇室・皇族といふ義になる。

天つ日の在らん限り、照らさん限り、天照皇大神の御子孫である皇室は、千代に八千代に彌榮やえに榮えて、變ることはあるまいと、御讚嘆遊ばされた御歌である。

世の中の生きとし生けるものみなに及ぶは
君が恵なりけり

明治天皇の御仁徳は、獨り萬民の上のみならず、生きとし生けるもの、すべてに及ばざるものは無い。之を歎美し給うた御歌である。

青柳のなびくすがたや大御代にしたがふ民
の心なるらむ

青柳の風に靡く姿は、民草が 天皇陛下に靡き従ふ心と同じであるとの意。一言一行、一舉手一投足、悉く皆君を思ひ、國を思ひ、民を思ひ給ふの御高情、實に欽すべきではないか。三千年來幾多の歌人中、誰か柳を見てかゝる感激を洩らしたるものぞ。

いつくしみ廣き御苑みそのに住むたづはもとの澤
邊も思はざるらむ

高雅な上品な御歌である。庭上の鶴によそへて 聖上陛下の御徳を述べ給うたのである。

おほやしまみうつくしみの廣き世はなみの
千里も鄰なりけり

「四海清」といふことを、詠ませ給へる御作。「大八洲云々」は、現代の大八洲即ち日本帝國は、みうつくしみの廣き御世との義。みうつくしみの廣き御世なるが故に、千里の海外も比鄰の如く、往き來も自由に、國交も亦敦きが、嬉れしとの御こゝろ。

天の下をさむる君がよろこびは青人ぐさの
さかえなるらむ

天皇陛下の第一の御慶びは、一に青人草即ち臣民の幸福繁榮に在るとの御こゝろ。
御即位式の勅語に

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ、國ヲ以テ家ト爲シ、民ヲ視ルコト子ノ如シ
と。されば、子なる臣民の榮えは、即ち 天皇の榮えであり、同時に 天皇の御慶びである。

天皇の榮え 天皇の御慶びは、亦同時に萬民の榮え、萬民の慶びである。かくして、

上下感孚シ君臣體ヲ一ニス、是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト並ビ存スベキ所ナリ
であるのである。

此の御歌は、わが國體の精華を謳歌し給うた國家的御大作と感誦し奉る。

聖上陛下を思ひ給ひて 九首

政事しげきあしたのには櫻けふはのどかに

みそなはすらむ

宵に衣て心を萬機に彈し、肝に食して念を百姓に勞せさせ給ひ、日として休ませ給ふ時もない 明治天皇の御上に、深く御同情遊ばされて、けふこそは御心長閑に庭櫻をみそなはすらむと、御喜びの眉を開き給ふの狀、實に婦人の鑑とすべきではないか。「政事しげきあした云々」は、忙中閑を得ての意。

きこしめすこと多ければ春の日もなほ短し

とおほしめすらむ

聖上陛下の御天職に向つて、御理解深き 皇太后の宮の尊き御心を見よや。此の理解あつてこそ始めて、「夫婦相和し」は、實現し得られるのである。「きこしめす」は、御仕事のこと。

にぎはへる民のかまどの朝けぶり御心安く

みそなはすらむ

仁徳天皇の昔も思ひ出されて、尊くも畏き極みである。

朝餉炊く民のかまどの煙が、盛んに立ち昇るを御覽せられるにつけても、御思ひは、忽ち聖上陛下の上に及ばせ給ひて、「御心安くみそなはすらむ」と喜び給ふ。天皇の御喜びは 皇太后の宮の御喜び、兩位一體、兩心一如、關雎の化の天下に洽ねかりしも、亦宜ならずや。

われ富むと見そなはすらし遠近をちこちの田づらの
煙にぎはひにけり

これ亦、炊煙の盛なる田家の景色を御覽じての御作。「われ富むとみそなはすらむ云々」。實に天下の至美、至善にあらずや。「われ富む」は、仁徳天皇の

君たみハ百姓ヲ以テ本ト爲ス、百姓ノ富メルハ朕ノ富メルナリ

と、皇后に宣ひし御詔の語である。歌の調べも、亦古今の絶唱。

數そひて御國にかへる軍ぶねいかに嬉しと
みそなはすらむ

この御歌は、明治三十八年、日露戦争終局後の觀艦式の際、詠み出で給うた御歌である。「數添ひて御國に歸る」は、捕獲せる敵の軍艦をいふ。

おほしめすこと多からむ大御代のみまつり
ごとのしげくなるにも

これは、明治四十年の御作である。當時電車の燒打事件や、社會主義問題などが世に出でて、宸襟を惱まし給ひしことが多かつた時であるから 皇太后の宮も、いと痛く御心を惱まし給うたこと、恐察し奉る。「おほしめすこと多からむ」と、御理解深き御言葉、身を切るが如く、實に恐懼に堪へない。

あしびきの山下庵の松みてもねがふは君が
千年なりけり

大正二年「山籠松」といふ題にて 聖上陛下の萬年を壽ことほぎ給うた御作である。至情掬すべし。

大前にさぶらふとみる夢の間は旅の宿とも
思はざりけり

旅におはして 聖上陛下を夢み給うたもので、御前に侍りて、何くれとなく御物語など申上ける夜半は、たとひ夢でも嬉しくて、旅の宿とも思はれないとの御歌である。美しい御心。美しい歌御。

君を思ふちゞの思のひとつだに貫きかぬる

われやなになり

此の御歌を拜誦して、人の妻たるもの、誰か泣かざるものぞ。誰か奮躍せざるものぞ。吾や何なりの一語を見ずや、此の吾は、何たる無力ぞ、愚物ぞと、慨然御自責のさま、凝つて金鐵の響を作す。あゝ何等の眞ぞ。善ぞ。美ぞ。凡そ女性の徳に關する限り、この御歌こそは、實に宇宙間第一の御聲と感深く拜誦し奉る。

坤德比なまびなく、關雎の徳天地を蓋ふわが 昭憲皇太后の宮にして、猶ほ且つ此の御嘆き、此の御自責を有たせ給ふ。あゝ天下幾千萬の女性諸君、宜しく百省千省せらるべし。

御旅なる 聖上陛下を思ひ給ひて 十二首

みちのくに鳴きてやゆきし時鳥ことしは聲
のすくなかりけり

「東北御巡幸のほど、郭公といふことを」と題して詠ませ給へる御歌である。明治九年六月二日、車駕東京を發し、東奥隈なく御巡幸あらせられ、七月二十一日、海路うみか恙なく御還幸あらせられたのであるが、郭公も 陛下の御後みあと慕ひて、奥羽地方へ鳴いて行つたのであらう。その證據には、今年は聲の少いと御仰せ。恭敬愛慕の念深きにあらずんば、誰かかゝる名歌を詠み出で得べき。

大宮の内うちにありても暑き日をいかなる山か

君はこゆらむ

明治十一年の御作、此の年八月三十日、車駕東京を發し、北陸東海を御巡幸。十一月九日御還幸遊ばさる。「いかなる山か君は越ゆらむ」の御情、切々として人に迫る。伊勢物語の「夜半にやひとり君が越ゆらむ」。甲斐の兵士の妻の、「いかなる山に年迎ふらむ」の歌も思ひ出されて、感いと深く侍る。

秋の日のてるにつけても思ふかな大御車の
うちはいかにと

是も、此の時の御歌。御眞情、眞に流露せるを見る。

はつ雁を待つとはなしにこの秋は越路の空
のながめられつゝ

「はつかりを待つとはなしに」の一句、餘韻^{ヒタヒタ}々々として盡きず。戀々の御情、眞に掬すべし。これも、此の時の御作。

年ごとにまちしさかりもこの秋はおそきを
たのむ庭の白菊

おなじころ、「待^ツ菊盛^リ」といふことを詠ませ給へる御歌。「遅きをたのむ」の一句。一首の眼目。

君のますあたりやいづこ白雲のた靡く方に
見ゆる山の端^は

これも同じころ、濱離宮にてよませ給へる御歌。品川灣に臨める濱殿の夕柱。侍女二三と物さびしく立たせ給ふ。皇太后の宮を想ひ奉れ。白雲たなびく彼方には、目路^{めぢ}遙かに見ゆる遠山の眉、依々として、糝糊として、墨繪の如し。忽ち御思ひは、聖上陛下の御上。今頃は、いづこの山か越え給ふらむ。天機麗はしくましますや、玉體に御恙^{おんつづが}あらせ給はずや。靡け此の山、君があたり見む。など思慕切々の御狀、一首の上に脈々たるを見ずや。御歌の美と、御心の美と相

待つて、鏗鏘カウカウとして金玉の響がある。

民のためいでます道ぞ北の海の霧も御船を
よきてたゝなむ

明治十四年七月二十九日、東京御發輦。東奥及び北海道に行幸。十月十一日御還幸。その折の御歌である。物見遊山の爲、出で立たせ給へる道にあらず、民の爲にの此の御旅なるぞ。願くは北海名物の霧も、御船を避けて立つてくれ、濃霧の爲、玉體に御恙のないやうに、との御詠嘆である。御至情、想ひ見るべし。

かへりますすほどもちかしときくの花うゑて
まつこそ樂しかりけれ

おなじ頃、「裁ウツ菊キク」といふことを詠ませ給へる御歌。待望の情、歡喜の様、眼前に髣髴たりである。「きくの花」に聞くの意を兼ね。

波風も憚かる船のうちにしてさやけき月や
みそなはすらむ

明治十八年七月二十六日、鳳輦宮城を發し、山口・廣島・岡山三縣を御巡幸。越えて八月十二日、無事御還幸になつた。その折、「船中月明カケ」といふことを詠ませ給へるが、此の御歌である。「波風も云々」は、皇威に恐れ憚りて、波風も立たぬ平穩な船の内といふことゝろ。

海は穩かにして鏡の如し。中天の明月は暗々として金波を射る。此の時 陛下亦甲板上に立たせ給ひて、遙に 大宮の上を思ひ出で給ひけんか。關々たる雉鳩は、河の洲にあり。相呼び 相答へ、乾坤茲に春長セコシへ也。

大君のみふね涼しく照らすらむ明石の浦の
夏の夜の月

此の御歌も、亦此の時の御詠である。佳調である。傑作である。

廣島の海邊はるかに葦鶴の千代よぶこゑは
きこしめすらむ

明治二十七年九月十三日、六馬東京を發し、同じき十五日、大森を移して、廣島大本營に御前進遊ばされ、明治二十八年五月三十日、東京に御凱旋遊ばされた。此の御歌は、此の頃の御作で、鶴聲に言寄せて、遙に 聖上陛下を想望し給へるさま、想ひ見るべし。

假宮の春いかならむ御園生の梅はのこらず
花咲きにけり

これもこの頃、「禁庭梅」といふ題にて、遙に 聖上陛下を懐ひやり給ひての御大作である。「かり宮」は、廣島の行在所。

「梅は残らず」の一句に、疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏、霞に匂ふ滿林の清觀が、ありありと目に見える。高雅雄麗な、よい御歌である。

情景雙美 十二首

庭ざくらみそなはす夜はともし火の花にも
風のいとはるゝかな

「ともし火の花」は、蠟燭の燄のこと 陛下が庭櫻御覽せさす今宵なれば、蠟燭の燄を動かす微風だにも、いとゞ心を惱ます。まして況んや花を散らすの疾風をやと、御厭ひ給ふの御歌である。全く 天皇中心の絶對愛、絶對奉仕である。

さびしさもしばし忘れて見るものは御前に
なれし螢なりけり

「民の捧けたる螢とて八王子より賜ひければ」と、詞書きして詠ませ給へる御作である。「御前になれし」は、陛下の愛し給ひし螢 陛下の御前に馴れ奉つた螢、その螢なるが故に、獨り居

の御さびしさも忘れて、嬉れしく御覽せさせ給ふと也。

行在所から、わざ／＼贈り給へる。陛下の御心のやさしさと、「御前になれし」と歌ひ給へる御心と、相愛相憐の美、以て天下に臨むべし。感いと深く侍る。

わが君はきこしめさずや時鳥みはしに近き

今のひとこゑ

「わが君はきこしめさずや」と、呼び掛け給ひし一語、曉天金鼓を鳴らし出す杜鵑の聲よりも、玲瓏に、遒健に、而も鋭く朗らかに。而して「御階に近き今の一聲」に、杜鵑一聲の美、宮殿夜明けの美。御階に明滅たる燈籠の火影の美。双々相映發して、我國上下三千年、幾百幾千の女性短歌中、正に第一位に推し奉るべき玉作と、感深く拜し奉る。

御馬には何をかふらむ秋の野の草は皆がら

花さきにけり

千草八千草咲き亂れたる秋の野べ。その美しき自然の大景に配するに、「御馬には何を飼ふらむ」と、聖上陛下の御上を思ひ給ふ優にやさしき御心情とを以てし、兩々相交響して、實に天來の神韻を作す。此種の美しき歌は、古來未だ會つてこれ無し。

さ霧たつこよひも月のさやけきは君がみ影

のそへばなりけり

「君が御影の添へば」は、聖上陛下と共に觀ればの御意。さ霧立つ夜は、月影も自然と曇るが常なれど、聖上陛下と共に御覽じ給ふが故に、うれしき心の眼で見給ふ月は、皎々とさやかに見ゆるであらう。明治十六年の御作。

としぐくに牧の羊の數そひぬみけし織らむ

もほどやなからむ

「みけし織らむ」の御言葉、女性獨占の好詩境。美しからずや。「みけし」は、御衣。明治十六

年の御作。

園守がらゑし垣根の初茄子おものとすべく
なりにけるかな

前の御歌は、みけしに織らむと宣ひ、これは御ものとすべくと詠ませ給ふ。是れ亦女性獨壇のところ。「おももの」は、主上の供御・御食物。明治二十五年の御作。

御車のかへります日のちかゝらばまちても

君にさゝげむものを

これは、小笠原島産の西瓜とて、人の贈り奉りたるに、詠ませ給ひし御歌。當時 聖上陛下には、行幸中にて入らせ給ひしと見え、「歸ります日の近からば」。『まちても君に』と、詠ませ給ひし御至情のほど、感激に堪へぬ。これは明治十三年の御作。

大君のおものゝ爲のほり井には清き水のみ
わきあがらなむ

「井」といふ題にて、詠ませ給うた御大作である。大君の御膳部を調理する爲の堀井には、清泉沸々として湧き出でよとの御意である。尊くも候はずや。

御園より折りてかへりしさくら花おまへの
瓶かみにまづぞさしてむ

「おまへの瓶」は 聖上陛下の御机邊の花瓶。「まづぞ」は字眼。これは明治二十五年、御年四十三歳の時の御作。

君がため折らむとすれば黒髪の上に亂れて
ちる櫻かな

これは、明治十三年の御作。「君がため」「黒髪の上」「ちる櫻」。あゝ、何等の美ぞ。何等の秀調ぞ。千誦萬誦、飽くを知らぬ。

このけしき見せまつらぬがをしと思ふ處も

多し旅に出でては

行啓中の御作。名所古蹟を見、美觀雄觀を御覽じて 聖上陛下に御見せ奉らぬが、惜しいとの御仰せ。

昭憲皇太后の 明治天皇に對し給ふ皇后としての内助的御態度は、全く没我的・犠牲的・奉仕第一的であつた。而も一女性としての御活動に至つては、社會的・國家的・國際的にまで及ばせ給ふ。即ち内は産業・教育・衛生・慈善・文學・美術の保護獎勵より、外は萬國赤十字社の事業を始め、國際的に御活躍給ひしこと、甚だ尠くなかつたのである。

洩れ承る所によれば、皇太后の宮が、葉山・沼津・鹽原・日光・新宿・濱離宮等に御出の節は、宮城より「聖上只今御機嫌克く御寢ぎよしん」との電話の無い限りは、何時になつても必ず御正坐遊ばされ

此の御電話があつて後、始めて宮城に向つて御寢ぎよしんの御挨拶を遊ばされ、かくて始めて御寢所に入らせ給ふが、常の例であつたとのことである。

明治天皇崩御の際も、日夜殯宮に奉仕あらせられ、又葉山の御座所には、御眞影を祀らせ給ひて、朝夕の勤行怠らせ給ふことなく、御供膳も、毎日好ませ給ふ品々、又初物を、御手づから御供へ給うたと洩れ承つてゐる。

明治四十年、第一回萬國赤十字社總會をロンドンに於て開會の節、皇太后の宮には、委員として參列した小澤男に託して、英國皇后陛下に御鄭重なる御挨拶があり、英后も亦御答詞があつて、兩國皇室の御親善上、一方ならぬ御寄與をなし給うたとのこと。

明治四十五年に、第九回總會がワシントンで開會した時も、亦小澤男をして萬國赤十字社に對し、平時救護事業の獎勵金として、金拾萬圓御寄附の事を提議せしめ給ひしところ、總會は日本皇后基金と命名し、満場一致を以て、感謝の決議をなしたといふ。

又、米國發行の雜誌クリステンアン・ヘラルドの主筆クロブッシュが小澤男に語つたといふ話に、「日本皇后陛下の御慈善は、世界周知のことであるが、尙ほ他に詩人としても名高く遊ばさ

れるので、今年—明治四十年—の瑞西ノベル賞金受賞候補者の一人として推されてゐるが、その當選は無論判明しないと。

我が國、惟神の道は、男女同位である。故に人として、一國民としては、人物次第で、別に尊卑の差等は無い。即ち天照皇太神が女性にておはしながら、二男弟の尊を置いて、天位に上らせ給ひ、以て六合に照臨しましたのでも明かである。

之に反し、夫婦となつては夫唱婦隨である。こは諾冊の御子産ませ給へる條に「女人まつ言ふはふさはしからず」といふ事蹟に徴してわかる。この御事蹟は、即ち家庭的夫婦的の御事で、國家的・社會的と、截然區別すべきである。然るに文學士次田某は、此の諾冊の尊の事蹟を以て「男尊女卑は我が古俗也」といつてゐる。愚も及ぶべからずだ。

されば、日本の女性に、二方面ある。社會的・國家的には、男女同位、即ち人物本位。家庭的夫婦的には夫唱婦隨、此の思想は動かすべからざる生物の鐵則、宇宙の常經である。

わが 昭憲皇太后の如きは、即ち我が國惟神の道であるこの天則に則り給うたもので、獨りわが日本とのみ謂はず、世界女性の齊しく模範とすべき大道である。

菊花第一 二首

みそのふの菊をおきては大君の千代のかざ
しと見む花ぞなき

「菊花第一」と題して、詠ませ給うた名品。

くれなるの御旗に匂ふみしるしの菊の上に
はたつ花ぞなき

是れ亦、「菊花第一」と題し給うて、皇室の彌榮、寶祚の無窮を、御歎稱になつた御傑作である。くれなるの御旗は、天皇旗。「みしるし」は御紋章。「上に立つ」とは、上に位する意。菊の上にはたつ花ぞなき」と喝破し給うた一語、天上天下第一の誇である。「菊花第一」は、即ち「天皇第一」であり、天皇第一は、取りも直さず、天皇至上、天皇中心、天皇即現神なる日本精神

の根柢神髓を歌ひ給うたもの。尊からすや。

御 仁 慈 十五首

あやにしきとりかさねてもおもふかな寒さ
おほはむ袖もなき身を

明治十二年、「折にふれて」の御歌であるが、實に溢る、ばかりの御仁慈・御同情、全く神の御聲である。寒さにて寒さを思ひ、苦にて苦を思ふは、世の常なれども、暖にて寒さを思ひ、樂にて苦を思ふは、至れる同情の人にあらざれば出来ない。皇太后の宮の至仁至慈なる綾の小袖、錦の衣を、取り重ね着給ひつる御身を以て、寒さを防ぐ衣も無い貧しい人々の身上を思ひやり給ふの至情、誠に尊く拜し奉る。

寒き夜に重ねむ袖もなき人の身をこそ思へ
埋火のもと

此の御歌も、亦前の御歌と同じ意味で、あれは綾錦の暖かき衣、これは炭火の熾んなる爐邊に於ての御速懐である。「埋火」は、爐火や火鉢の火など。

皇太后の宮の此の至れる御同情は、直に實行の上に見はれて、幾多の美しき御事蹟となつてゐる。語を寄す、世の紳士淑女達よ、卿等に果して此の美しき尊き同情ありや。實行ありや。

みこしぢの雪にこもりて處女らは夏の衣や
織り出すらむ

「み越路」は、今の越前・越中・越後のこと。みは三にあらず、美稱の接頭語。夏の衣は、越後上布のこと。小千谷町・十日町などがその産地で、これを織り出すところの處女達の上を思ひ給うての御作である。

蟻は夏の間に冬の糧を貯ふ。雪の中に、はや夏の衣を織りたむるは、深謀遠慮の至り、深き御心のほど、味ふべし。